大分県文化財調査報告書第110輯

炭（すみ）　竈（かまど）　遺　跡

―県道白丹竹田線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

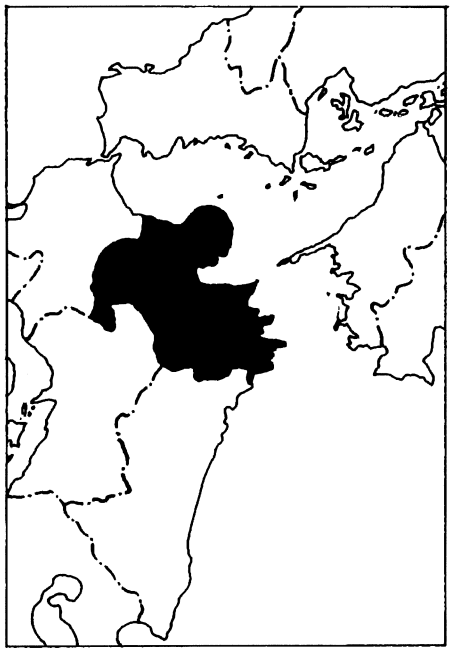
２０００

大分県教育委員会

大分県文化財調査報告書第110輯

炭　竈　遺　跡

－ 大分県竹田市大字炭竈所在遺跡の調査 －



2000

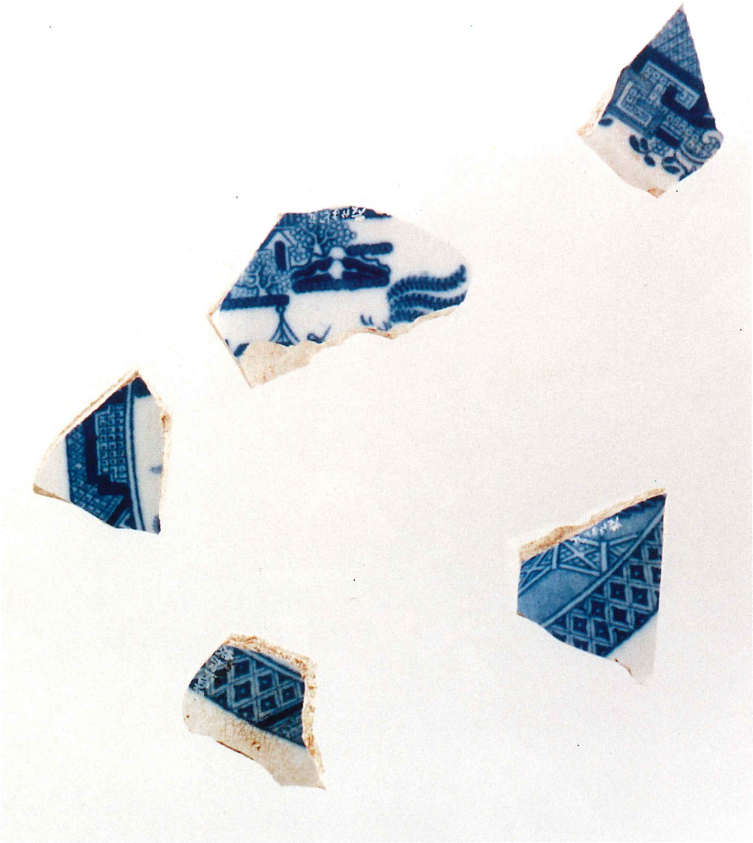
大分県教育委員会

炭竈遺跡遠景（南から）

Ⅰ区全景（東から）

瘤付き土器
（縄文時代早期）

硝　子　製　品



ヨーロッパ陶器

ホーカー液

序　　文

大分県では旧石器時代以来、各時代の遺跡が数多く知られています。これらは郷土の歴史を解明していくために欠くことのできない貴重な遺産です。このため大分県教育委員会では、関係機関の協力をえて各種県事業予定地に対する事前の分布調査・埋蔵文化財の取り扱いの協議・発掘調査等を実施してまいりました。

本書は、県道白丹竹田線の改良工事に伴い平成10年度に実施した大分県竹田市に所在する炭竈（すみかまど）遺跡の埋蔵文化財発掘調査の記録です。調査では、縄文時代、弥生時代、古墳時代及び近世等の各時代の遺跡が発見されました。

本書の成果が広く活用され、地域の歴史の究明の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査の円滑な実施にご理解とご協力をいただきました地元の方々、県土木建築部ならびに関係各機関に対して厚くお礼申し上げます。

平成12年３月31日

大分県教育委員会教育長
田　中　恒　治

例　　言

1．本書は、県道白丹竹田線道路改良工事に伴い大分県土木建築部竹田土木事務所の委託を受けて、大分県教育委員会が実施した竹田市炭竈遺跡の発掘調査報告書である。
2．発掘調査地区は東部（Ⅰ区）・西部（Ⅱ区）に分かれる。遺構の実測・写真撮影は調査担当者のほか、Ⅱ区では、埋蔵文化財サポートシステムも担当した。
3．遺物の整理作業は大分県教育庁文化課文化財資料室で行なった。遺物の実測図は資料室の整理補佐員・執筆担当者の他、石器の一部は（株）マエダが、陶磁器の一部は九州文化財リサーチが担当した。
4．本書の執筆は、Ⅱ区の陶磁器と関連土坑を吉田　寛が、他を高橋信武が行なった。文責は吉田の担当部分のみ文末に明記した。
5．遺物写真撮影は文化課の栗原　眞・柳　智子が担当した。
6．出土遺物ならびに図面・写真等は大分県教育庁文化課文化財資料室において保管している。
7．本書に用いた方位は磁北である。
8．本書の編集は高橋が担当した。

本 文 目 次

第１章．はじめに …… 1
　１．調査に至る経過 …… 1
　２．埋蔵文化財の調査と調査組織 …… 1

第２章．地理的歴史的環境 …… 1
　１．地理的環境 …… 1
　２．歴史的環境 …… 3

第３章．調査の概要 …… 3

第４章．Ⅰ区の調査 …… 3
　１．調査の概要 …… 3
　２．層　　序 …… 6
　３．縄文時代の調査 …… 6
　４．弥生・古墳時代の調査 …… 22
　５．そ　の　他 …… 45

第５章．Ⅱ区の調査 …… 46
　１．調査の概要 …… 46
　２．竪　　穴 …… 46
　３．土　　坑 …… 46
　４．井　　戸 …… 85
　５．溝 状 遺 構 …… 85
　６．階段状遺構 …… 87

第６章．ま　と　め …… 88
　（報告書抄録） …… 91

図 版 目 次

第１図　炭竈遺跡位置図（1/50.000）…… 2
第２図　炭竈遺跡位置図（1/10.000）…… 4
第３図　炭竈遺跡地形図（1/2.000）…… 5
第４図　Ⅰ区西部遺構配置図…… 5
第５図　Ⅰ区東部遺構配置図…… 6
第６図　土層断面図…… 8
第７図　４Ｃ区Ⅲ層の礫群出土状況…… 8
第８図　縄文時代の土器実測図…… 9
第９図　縄文時代の土器実測図…… 10
第10図　縄文時代の土器実測図…… 10
第11図　縄文時代の土器実測図…… 12
第12図　縄文時代遺物包含層出土石器…… 13
第13図　Ⅰ区Ⅲ層出土石器（2/3）…… 14
第14図　Ⅰ区Ⅴ層出土石器（2/3）…… 16
第15図　Ⅰ区Ⅴ層出土石器（2/3）…… 17
第16図　Ⅰ区Ⅴ層出土石器（2/3）…… 18
第17図　Ⅰ区Ⅴ層出土石器（2/3）…… 19
第18図　１号住居跡実測図（1/60）…… 22
第19図　１号住居跡出土土器…… 23
第20図　２号住居跡実測図（1/60）…… 24
第21図　２号住居跡出土土器…… 24
第22図　２号住居跡出土石器…… 25
第23図　３号住居跡実測図（1/60）…… 25
第24図　３号住居跡出土遺物実測図…… 26
第25図　３号住居跡出土石器…… 26
第26図　４号住居跡実測図（1/60）…… 27
第27図　４号住居跡出土遺物実測図…… 28
第28図　４号住居跡出土磨製石鏃・同未製品（2/3）…… 28
第29図　４号住居跡出土石器…… 29
第30図　５号住居跡実測図（1/60）…… 30
第31図　５号住居跡出土遺物実測図…… 31
第32図　５号住居跡出土磨製石鏃・同未製品・使用痕ある剥片（2/3）…… 32
第33図　６号住居跡実測図（1/60）…… 33
第34図　６号住居跡出土遺物実測図…… 34
第35図　６号住居跡出土遺物実測図…… 35
第36図　６号住居跡出土石器…… 35
第37図　７号・８号住居跡実測図（1/60）…… 36
第38図　７号住居跡出土遺物実測図…… 37
第39図　８号住居跡出土遺物実測図…… 38

第40図　8号住居跡出土石器（2/3）…… 39
第41図　9号・10号住居跡実測図（1/60）…… 40
第42図　9号住居跡出土遺物実測図 …… 41
第43図　9号住居跡出土石器（2/3）…… 41
第44図　9号住居跡出土磨製石鏃・剥片(2/3) …… 41
第45図　ＳＤ１と（１号溝状遺構）周辺実測図 …… 43
第46図　ＳＤ１出土遺物 …… 44
第47図　ＳＤ１出土石器(2/3) …… 44
第48図　Ⅰ区ＳＫ１（１号土坑）実測図（1/40）…… 44
第49図　Ⅱ区遺構配置図 …… 47
第50図　Ⅱ区西部の凝灰岩出土状況 …… 48
第51図　Ⅱ区遺構断面図（第49図に位置記入）…… 49
第52図　Ⅱ区ＳＫ１出土陶磁器(1/3)① …… 50
第53図　Ⅱ区ＳＫ１出土陶磁器(1/3)② …… 51
第54図　Ⅱ区ＳＫ１出土陶磁器(1/3)③ …… 52
第55図　Ⅱ区ＳＫ１出土陶磁器(1/3)④ …… 53
第56図　Ⅱ区ＳＫ１出土陶磁器(1/3)⑤ …… 54
第57図　Ⅱ区ＳＫ１出土陶磁器(1/3)⑥ …… 55
第58図　Ⅱ区ＳＫ１出土陶磁器(1/3)⑦ …… 56
第59図　Ⅱ区ＳＫ１出土陶磁器(1/3)⑧ …… 57
第60図　Ⅱ区ＳＫ１出土陶磁器(1/3)⑨ …… 58
第61図　Ⅱ区ＳＫ１出土陶磁器(1/3)⑩ …… 59
第62図　Ⅱ区ＳＫ１出土硝子製品(1/2)① …… 62
第63図　Ⅱ区ＳＫ１出土硝子製品(1/2)② …… 63
第64図　Ⅱ区ＳＫ１出土硝子製品(1/2)③ …… 64
第65図　Ⅱ区ＳＫ１出土硝子製品(1/2)④ …… 65
第66図　Ⅱ区ＳＫ１出土硝子製品(1/2)⑤ …… 66
第67図　Ⅱ区ＳＫ１出土硝子製品(1/2)⑥ …… 67
第68図　Ⅱ区ＳＫ１出土硝子製品(1/2)⑦ …… 68
第69図　Ⅱ区ＳＫ１出土硝子製品(1/2)⑧ …… 69
第70図　Ⅱ区ＳＫ１出土硝子製品(1/2)⑨ …… 70
第71図　Ⅱ区ＳＫ２実測図(1/40) …… 80
第72図　Ⅱ区ＳＫ３(1/20)・４・５・７～11・31実測図(1/40) …… 81
第73図　Ⅱ区ＳＫ12～23実測図(1/40) …… 83
第74図　Ⅱ区ＳＫ９・24～29実測図(1/40) …… 84
第75図　Ⅱ区ＳＫ27・30・31(1/40)・ＳＥ１(1/20)実測図（1/40）…… 86
第76図　ＳＤ１出土陶磁器(1/3) …… 87
第77図　西段包含層出土陶磁器(1/3) …… 87
第78図　萬朝報掲載広告の化粧瓶 …… 89
第79図　炭竈遺跡出土西洋陶器の類例（汐留遺跡）…… 90

第1章. はじめに

1．調査に至る経過

県道白丹竹田線は、竹田市街地より久住町白丹にいたる路線である。山や川の多い地区を通るため道路は屈曲し、近年通行量の増大にともない交通事故の危険性が増加しつつある。また、この道路通過地区には稲葉川ダムの建設が予定されており、現状の曲がりくねった片側通行の道路では不便であり、県土木建築部では県道白丹竹田線の道路改良工事を計画し、県竹田土木事務所により事業着手された。

大分県教育委員会では、計画区間内において用地買収が終了し試掘調査が可能となった時点（1997年２月）で土木建築部より竹田市大字炭竈の計画予定地における埋蔵文化財の有無・範囲・状態等の確認のため分布調査の依頼を受け、分布調査を実施したところ、遺跡推定地を確認し、1997年12月16日～17日に試掘調査を行なった。

この結果に基づき、大分県教育委員会文化課と土木建築部との協議を進め、1998年度に炭竈遺跡の発掘調査を実施することになった。

2．埋蔵文化財の調査と調査組織

調査の組織

調査主体	大分県教育委員会
	田中恒治（教育長）
調査総括	後藤一郎（教育庁文化課課長）
	田原基之（　同　参事兼課長補佐）
調査主任	清水宗昭（　同　課長補佐兼埋蔵文化財第二係長）
調査担当	高橋信武（　同　副主幹・Ⅰ区調査担当）
	若杉竜太（　同　嘱託・Ⅱ区調査担当）

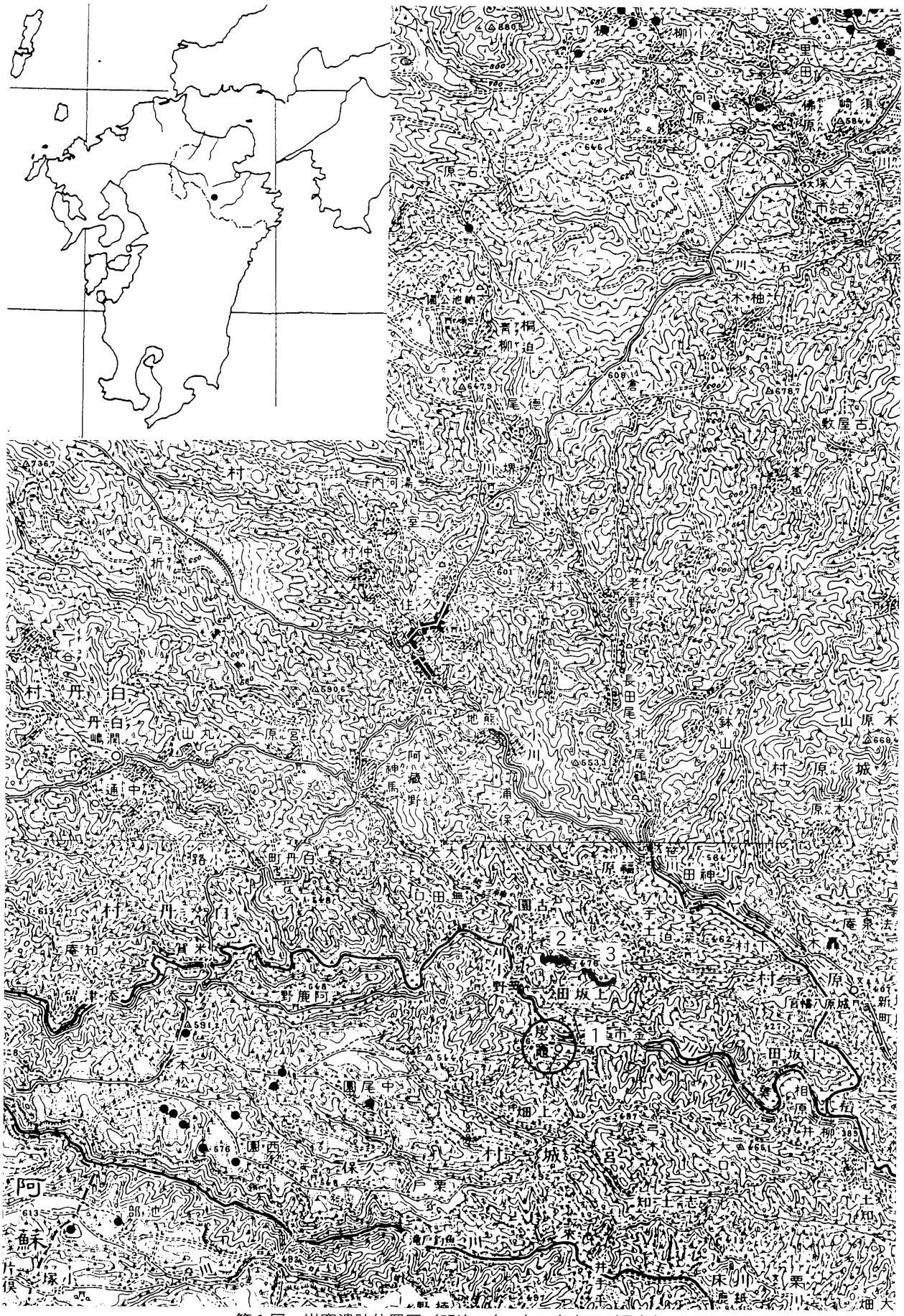
第2章. 地理的歴史的環境

1．地理的環境

遺跡は大分県竹田市大字炭竈に所在する（第１図）。竹田市は大分県の南西部にあたり、北に久住連山を仰ぎ、西に阿蘇五岳を望み、南には九州の屋根である祖母・傾山系が連なり、大野川の上流域にあたる。市域は阿蘇山と久住連山からの堆積物による溶結凝灰岩の平坦面を大野川が侵蝕し、ほぼ東西方向に延びた多数の台地が形成されている。炭竈遺跡付近は大野川の支流、稲葉川による開析谷によって侵蝕された東西約600m・南北約900mの小丘陵となっており、上下二段の河岸段丘を形作っている。標高は北側で約390m、南側は一段高くなり440mをはかる。稲葉川の北側にはさらに20mほど一段低い段丘がある。

双城中学校生徒の見学会

調査対象地の現状は東部は水田、西部は畑で



第１図　炭竈遺跡位置図（明治38年 大日本帝国測量部）

ある。水田は数十年前に小規模な圃場整備が行なわれている。

2．歴史的環境

炭竈遺跡は、大分県内陸部、阿蘇外輪山の周辺に緩やかに広がる東方の丘陵上に立地する。このあたり一帯の台地上は県下有数の畑作地帯として知られているが、1970年代以降土地改良事業が活発化するのに伴い大分県教育委員会の支援のもとで市町村教育委員会による埋蔵文化財の発掘調査が盛んに行われてきた。竹田市、直入郡荻町・直入町、大野郡大野町・三重町・朝地町・千歳村・野津町等である。炭竈遺跡の位置する場所は竹田市北部にあたり、九州の屋根とも呼ばれる久住連山の南麓に広がる久住高原に隣接しており、この付近はこれまで発掘調査の空白地帯であった。1995年以降は久住高原でも圃場整備事業に伴う発掘調査が行われるようになり、この地域の大昔の様子が、明らかになりつつある（参考文献）。

周辺の遺跡としては、北側を流れる稲葉川の北側の河岸段丘の背後の崖面に数百メートルに渡り座主横穴墓群（第１図２）、法池坊横穴墓群（３）がある。凝灰岩に彫り込まれたこれらの古墳時代の墓は、現状では入り口部分の崩壊したものが多い。前面の段丘上では水田耕作が行われ近年圃場整備が実施されたが、地元には古代寺院の伝承がある。

〈参考文献〉

竹田市教育委員会1976～1992「菅生台地と周辺の遺跡」Ⅰ～Ⅳ他
久住町教育委員会1996「市第Ⅰ遺跡・石田遺跡」
久住町教育委員会1997「市第Ⅱ遺跡・市第Ⅲ遺跡・仏原第Ⅰ～Ⅲ遺跡」
久住町教育委員会1999「板切遺跡群（第Ⅰ～Ⅴ）・小原田遺跡」

第3章. 調 査 の 概 要

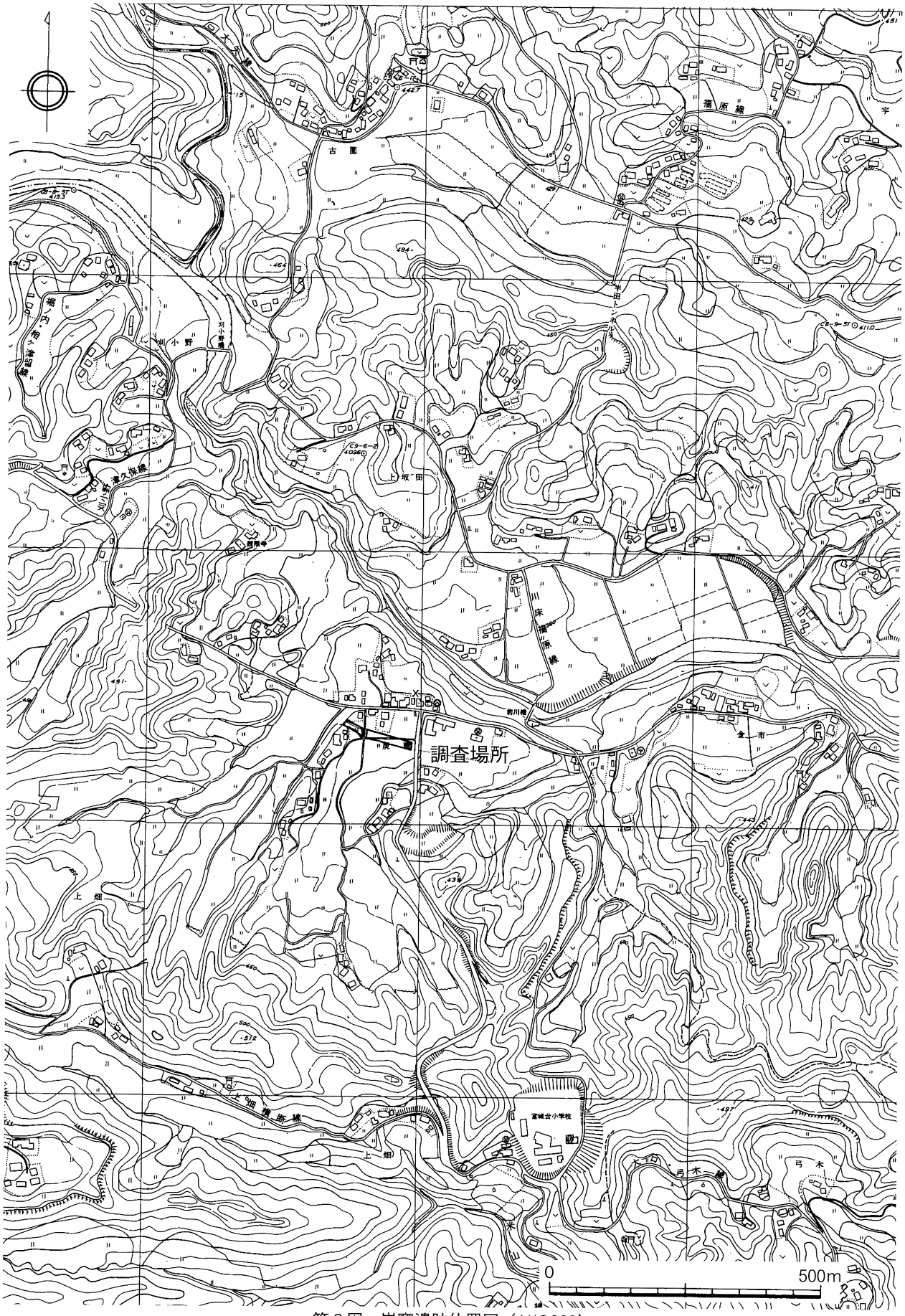
1997年度に行なった試掘調査では遺跡は台地の東部で確認されておらず、本調査（1998年5月26日～1998年12月２日）は公民館分館の西側に南北に走る道路から西側を調査対象とした。調査対象地のうち東半分の水田部分をⅠ区とし、部落内の道路をはさんだ西部をⅡ区として、Ⅰ区の調査終了後にⅡ区の調査を行なった。

第4章. Ⅰ 区 の 調 査

1．調査の概要

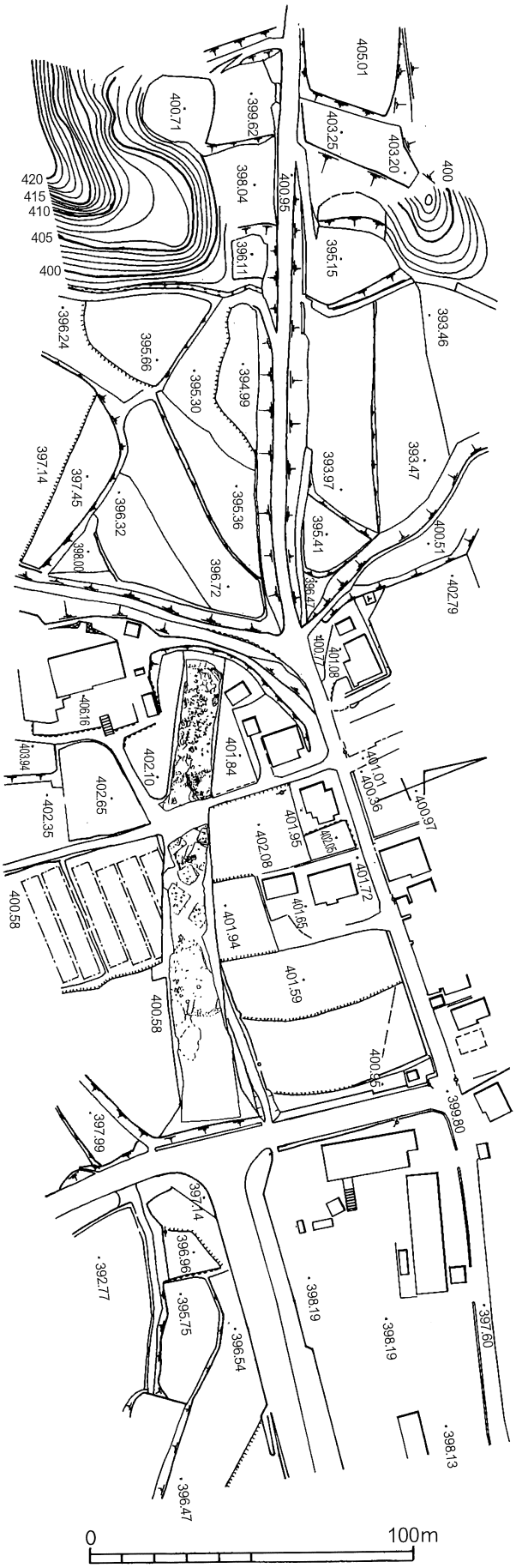
Ⅰ区の調査範囲はほぼ東西に約95m、幅は約11m～14m前後、面積約1,000㎡である。調査前の現状は水田として利用されたため、ちょうど中央部付近に段差が認められ、以前の圃場整備より前の水田区画に伴うものとみられる。また、東部には重機による大規模な撹乱が二か所にあった。

調査はまず重機による表土剥ぎののち、手作業による遺構検出をおこなった。調査区内は東西10m・南北８mに区画し、番号をつけた。弥生・古墳時代の竪穴群は西半分に集中し、発掘の進展に伴って下層に縄文時代の遺物包含層があることが判明し、竪穴等の調査が終了した地区（３Ｃ区・４Ｃ区・５Ｃ区）の遺物包含層（下は早期まで）を調査した。遺構のない、あるいは希薄な東部では後・晩期

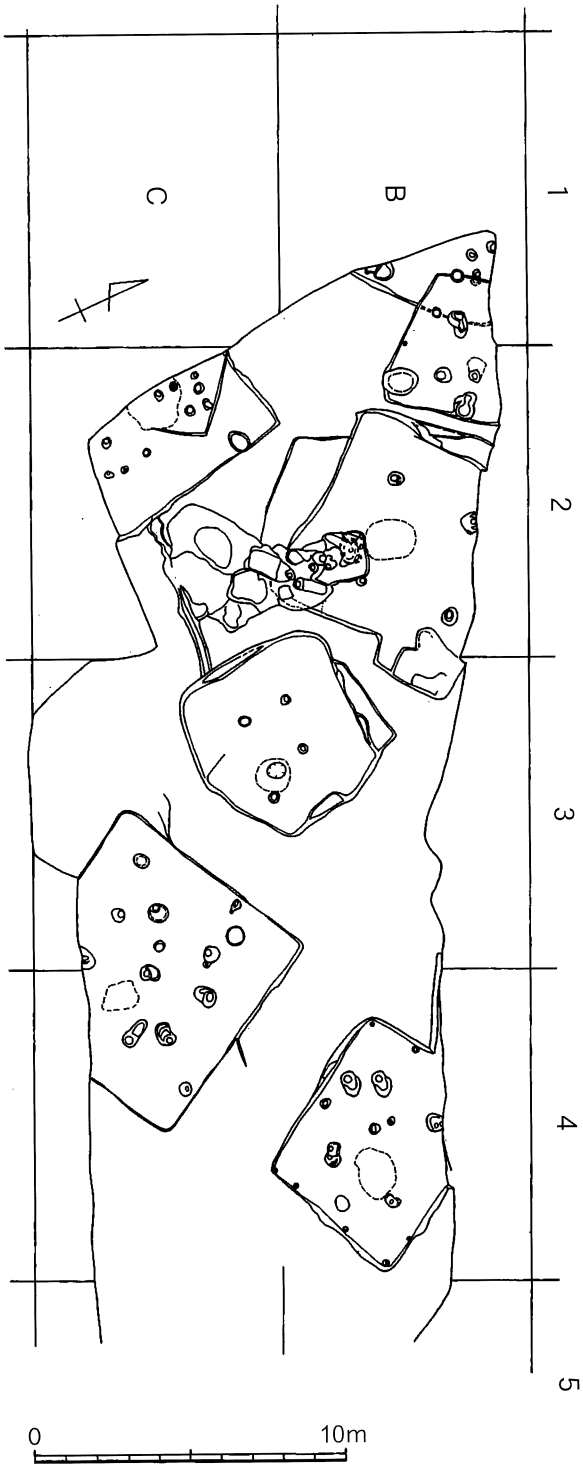


第２図　炭竈遺跡位置図（1/10,000）

に相当する層を発掘調査した。



第３図　炭竈遺跡地形図（1/2,000）



第４図　Ⅰ区西部遺構配置図

2．層　　序

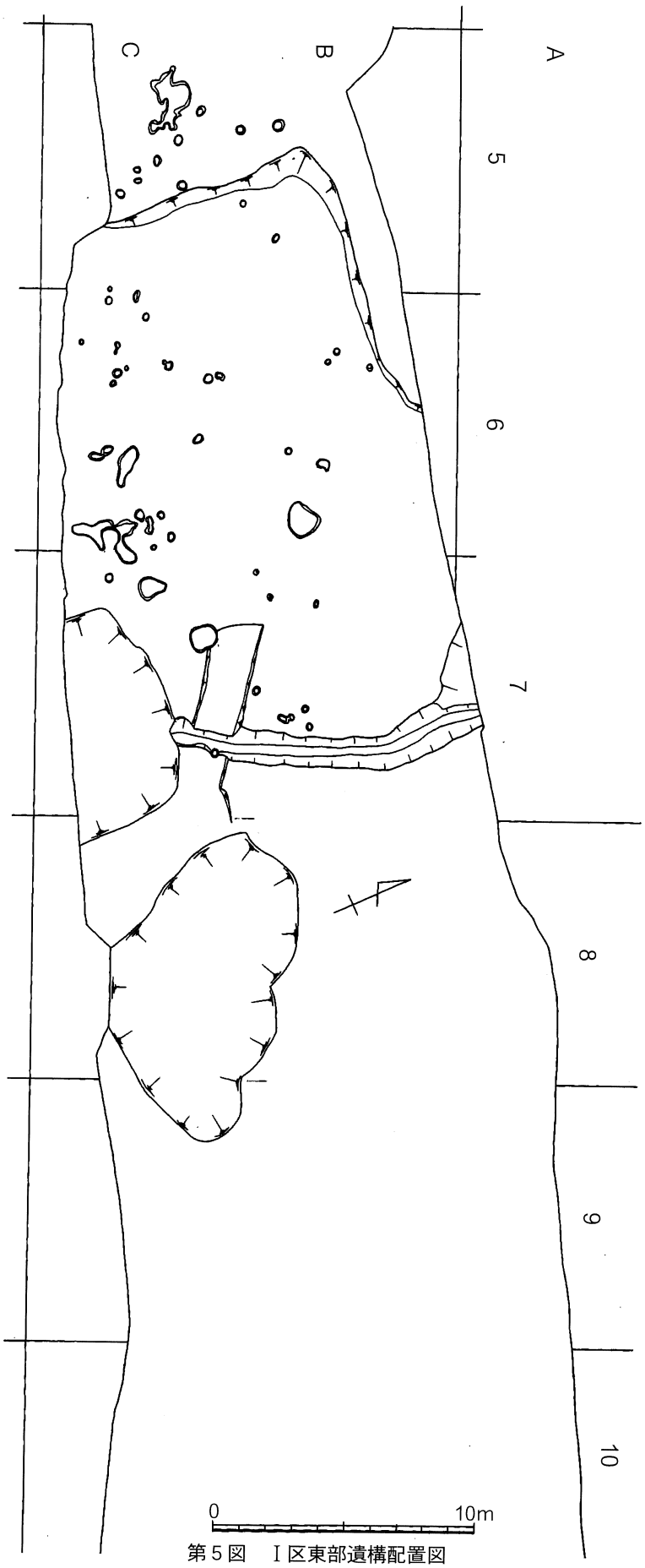
本遺跡の層序は最近発掘例が多い北側の久住町や北東側の直入町とは異なり、南側の竹田市菅生台地に似ている。上層から下層に次のような層序である（第６図）。

Ⅰ層：表土・厚さ約30㎝
Ⅱ層：黒色土・ほとんど残存しない
Ⅲ1層：黄褐色土・橙色スコリアを若干含む・厚さ約20㎝
2層：黄褐色土・橙色スコリアなし・厚さ約20㎝以下
Ⅳ層：アカホヤ火山灰のブロックを含む層・厚さ約20㎝
Ⅴ1層：Ⅳ層とⅤ2層との漸移層・３Ｃ区で塞の神式が出土・厚さ約15㎝～20㎝
Ⅴ2層：茶褐色土・Ⅴ3層よりも茶色味がある・コブ付き土器包含層・厚さ約20㎝
Ⅴ3層：黒茶褐色土・Ⅴ2層よりも黒味がある・厚さ約30cm
Ⅵ層：褐色土・いわゆるローム層

Ⅲ層からは縄文前期・後期・晩期の遺物が出土したが、１・２層の区別はできなかった。Ⅴ1層とⅤ2層から早期の遺物が出土した。１点毎の厳密な遺物取り上げをしなかったが、塞の神式はⅤ1層から、無文土器はⅤ2層から出土する傾向があった。

3．縄文時代の調査

Ⅰ区の調査中に、竪穴住居跡内・溝状遺構内などから縄文時代の土器・石器が出土し、縄文時代の遺物を包含する層を確認した。当初予定していなかったので、十分な時間的余裕はなかったが、発掘調査を行なった。調査区東部ではⅢ層の遺物を三次元的に採り上げ、西部では３Ｃ区・４Ｃ区・５Ｃ区で区



第５図　Ⅰ区東部遺構配置図

毎に層別に一括して採り上げた。ただし、Ⅴ層は細分せずに採り上げた。

遺構の概要

本遺跡で検出した縄文時代の遺構は、集石遺構１基である。

集石遺構（第７図）

これは４Ｃ区で検出した集石遺構である。Ⅲ2層の中で28個の礫が同一平面上に、東西1.6ｍ・南北1.0ｍに比較的に集中していた。出土層がⅢ2層であること、この層に該当する土器が轟式しかみあたらない点から、前期轟式に伴うものと考える。

Ⅰ区の遺構検出状況（西から）

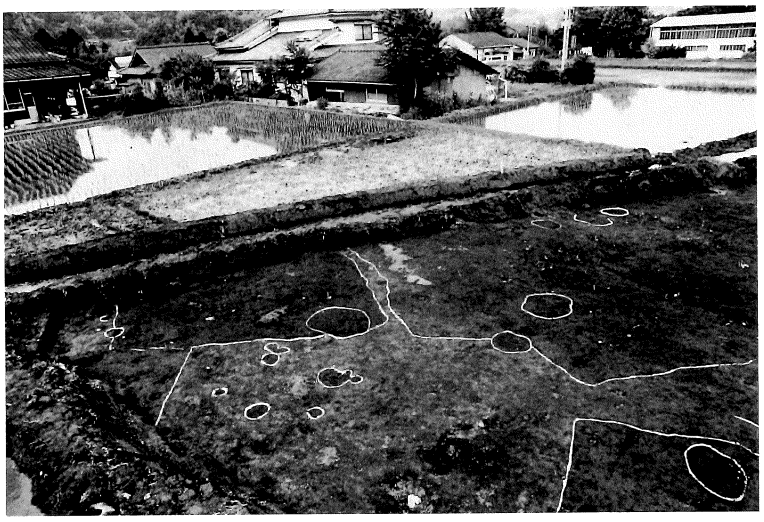
出土遺物

縄文時代の土器

（縄文時代早期）

瘤付き土器（第８図８・９・第９図１）

１は３Ｃ区で10点、４Ｃ区で７点出土したものが接合したもので、復元口径24.0㎝・現存高16.8㎝をはかる・口縁部に現状で４個の瘤状の突起が付いている（全体では推定９個）。器壁は胴部で12㎜程度と厚手で、器面の調整はナデ、胎土には角閃石と長石を含む。Ⅴ1層からも出土したが、Ⅴ2層からの出土もみられたので、本来の位置はⅤ2層であろう。８は３Ｃ区Ⅴ層、９は４Ｃ区Ⅴ層からの出土。ともに厚さ６㎜ほどである。



Ⅰ区西部の遺構検出状況

刺突文土器１（第８図１・２）

１は４Ｃ区Ⅴ2層、２は同Ⅴ層出土の注記のあるもの。黒茶褐色で、長石を多量に含む。内面はへら削り、外面は１がナデ、２が二枚貝調整。刺突は器面に向かって右斜めから、直径３㎜程度の棒で行なっている。

無文土器（第８図４～７）

４は９号住居跡出土。器面はナデ調整。胎土に大粒の砂粒をかなり含む。

Ⅰ区東部の遺構検出状況

焼成後の穿孔がある。５～７は４Ｃ区Ｖ層出土。角閃石と長石とを少量含み、このあたりに一般的な土器の胎土である。

条痕文土器（第８図10～17）

10は３Ｃ区Ｖ層出土。外面は細い二枚貝条痕調整。11・12は４Ｃ区Ｖ層出土の同一個体。外面は大型の二枚貝調整。11の内面はナデ、12の内面は二枚貝条痕調整。13～17は同一個体。13は３Ｃ区のＶ1層とＶ2層出土。14は３Ｃ区Ｖ1層、15は３Ｃ区Ⅳ層・Ｖ層・Ｖ2層出土。16は３Ｃ区Ｖ2層、17は３Ｃ区Ｖ層出土。器面調整は両面とも二枚貝条痕。すべて一般的胎土。

撚糸文土器（第８図18～20・22～25）

18は４Ｃ区Ｖ2層出土で薄手、19・20は３Ｃ区出土の同一個体。22～25は同一個体。22は３Ｃ区Ｖ2層、23～25は4C区Ｖ層出土。器面はナデ調整で胎土は一般的、やや黄色っぽい色調。

刺突文土器２（第８図21）

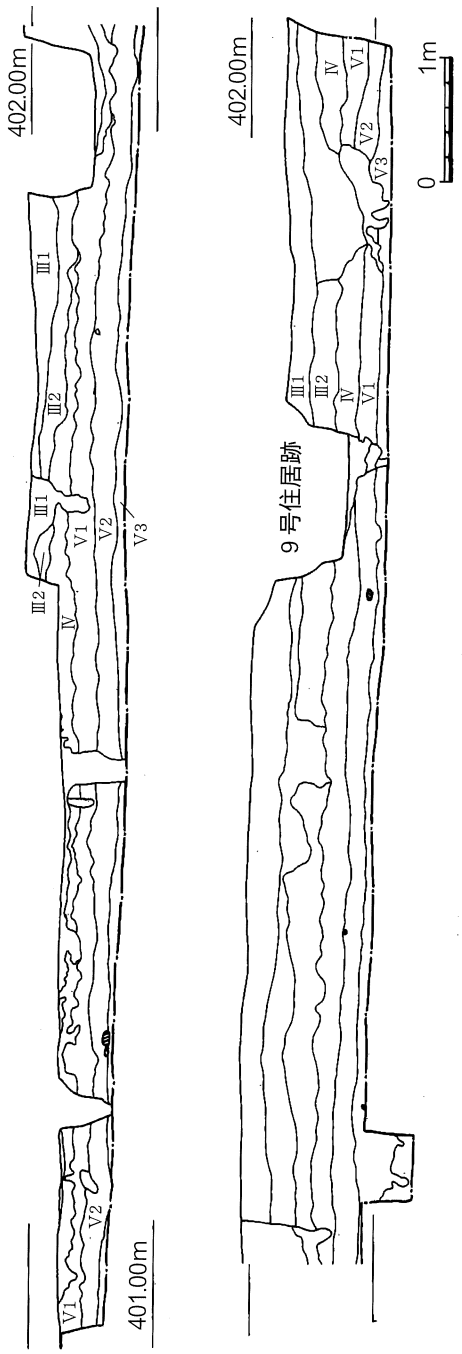
刺突文が密集するもので、平栫式か塞の神式であろう。３Ｃ区Ⅳ層から出土した。

手向山式土器（第８図39）

４Ｃ区Ｖ層から出土した。胎土に長石を多量に含む。４条の刻み目突帯があり、口唇部にも刻み目をもつ。

塞の神式土器（第8図26～32）

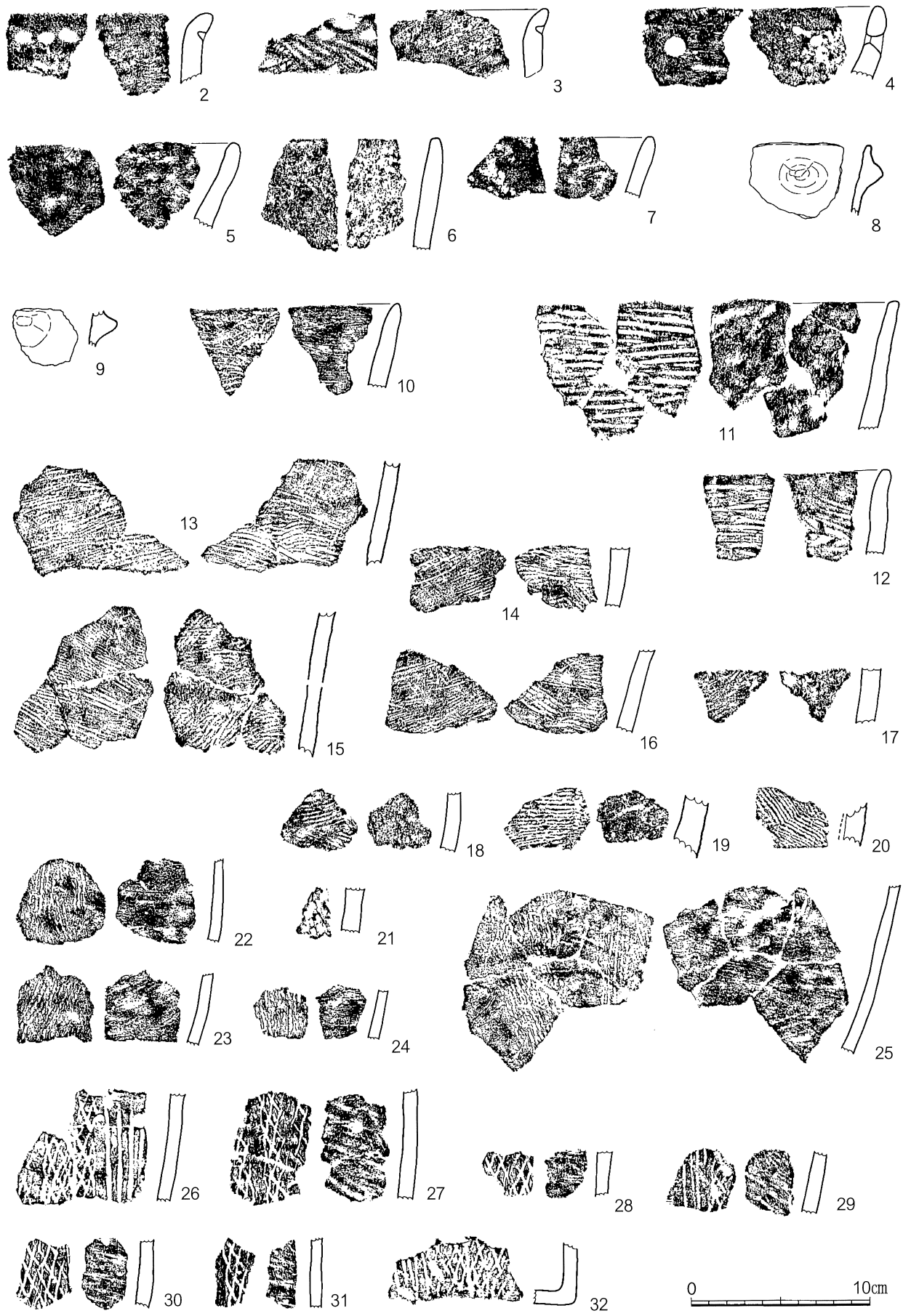
同一個体である。５号住居跡・６号住居跡から各１点、３Ｃ区Ⅳ層から２点、３Ｃ区Ｖ1層から４点、同Ｖ1･2層から２点、同Ｖ2層から１点出土した。口縁部はなく、胴部と底部片である。網目状撚糸文を縦方向に施し、隣の撚糸文との間に空白を設ける（26・27）。空白の隣に縦方向の沈線を描く（26・29・32）。26・32では６本沈線である。胎土に細かな金色の雲母を微量含む。



第６図　土層断面図

第7図 ４C区Ⅲ層の礫群出土状況

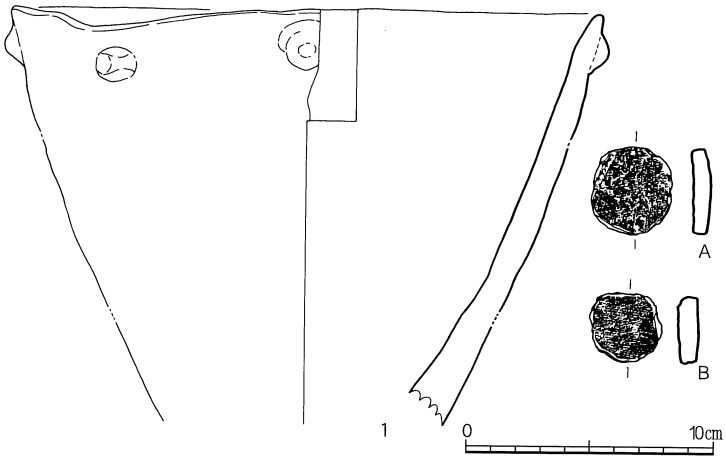
礫群出土状況



第８図　縄文時代の土器実測図

土器片加工品（第９図Ａ・Ｂ）

Ａは３Ｃ区の、Ｂは４Ｃ区のＶ層出土で、無文土器片を打ち欠いたものである。Ａは全周にわたり簡単に磨いている。10.7ｇ。Ｂは打ち欠いただけのもので、8.2ｇ。



第９図　縄文時代の土器実測図

（縄文時代前期）

轟式土器（第10図33～38）

33・34・35・38は４Ｃ区Ⅲ層、36は表土、37は５Ｃ区Ⅲ層出土。33は上部に爪形文を２段、下部に突帯１条がめぐる。34は縦に短沈線文を４段つけるが、左端にはみられない。35は爪形文を３段めぐらす。36は５段の爪形文をもつ。施文は器面に対して正面から左手の爪で刺突して行なっている。37は縦方向の粘土紐に刻み目をつけ、左右の器面に短沈線を２段施文している。38は刻み目突帯２条をもつ。これらは轟式の中では後半から終末頃のものである。

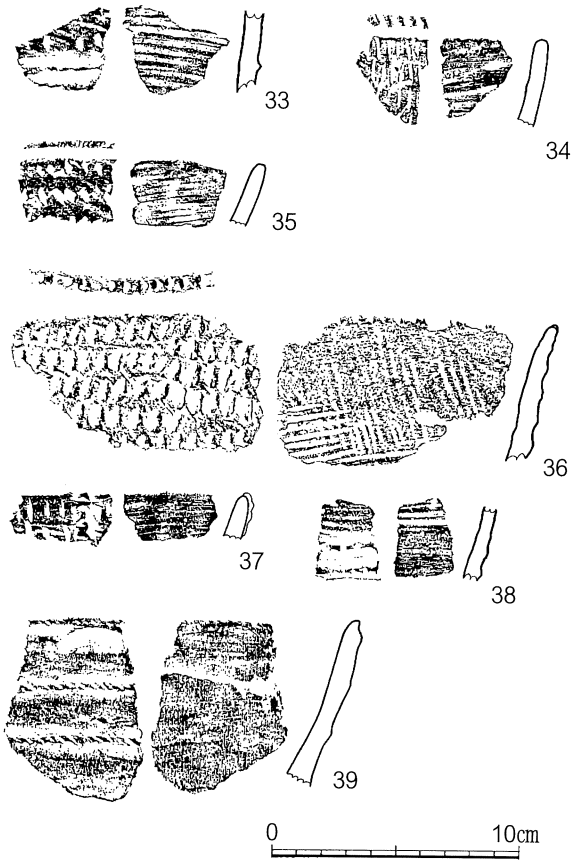
（縄文時代後期）

鳥井原式土器（第11図39・42）

39は細線羽状文を口縁部外面につける。

三万田式土器（第11図40・41）

２点とも間隔をおいて凹線を描いている。



第10図　縄文時代の土器実測図

御領式土器（第11図43）

これ１点だけである。

（縄文時代晩期）

晩期前半土器（第11図44～46・55・57・72・73）

以上の浅鉢の他深鉢もあるが、時期的な器形変化に乏しいので細分しない。

晩期後半土器（第11図47～54・70・74）

刻み目のない突帯文の時期。

晩期末土器（第11図71）

胴部の刻み目突帯の破片である。

縄文時代の石器

早期に該当するのはＶ層である。遺物の出土層位は、土層断面図をとった近くではＶ1層とＶ2層とを区別したが、一括してＶ層としたものもある。前期・後期・晩期に該当するのはⅢ層である。

磨石（すりいし）・敲石類（第12図１～11）

５（８Ａ区）・６（７Ｂ区）はⅢ層、１～４・７～10は４Ｃ区Ｖ層、11は３Ｂ区Ｖ2層出土である。点々の部分は敲打痕、二点鎖線の範囲は磨り減らされた

部分である。

Ⅲ層の石核石器・剥片石器（第13図1～9）

1は節理により偏平な板状に剥げる石材の1側辺に小剥離を加えて刃部をつくった削器である。2は円礫から剥がれた剥片を加工した偏平打製石器である。両側の側辺の相対する位置が敲打により刃潰しされている。欠損している。3は円礫面を残す剥片。4も円礫面を残す剥片で、上下両端からの二次的な剥離をもつ。楔形石器。5は灰色のチャートの剥片。6は最近、阿蘇山東北麓付近に原産地推定されている黒曜石の剥片。7は1側辺に刃潰れのある流紋岩の剥片。8は流紋岩の剥片。打点は円礫面。9は剥片の一部に二次加工を加えた削器である。

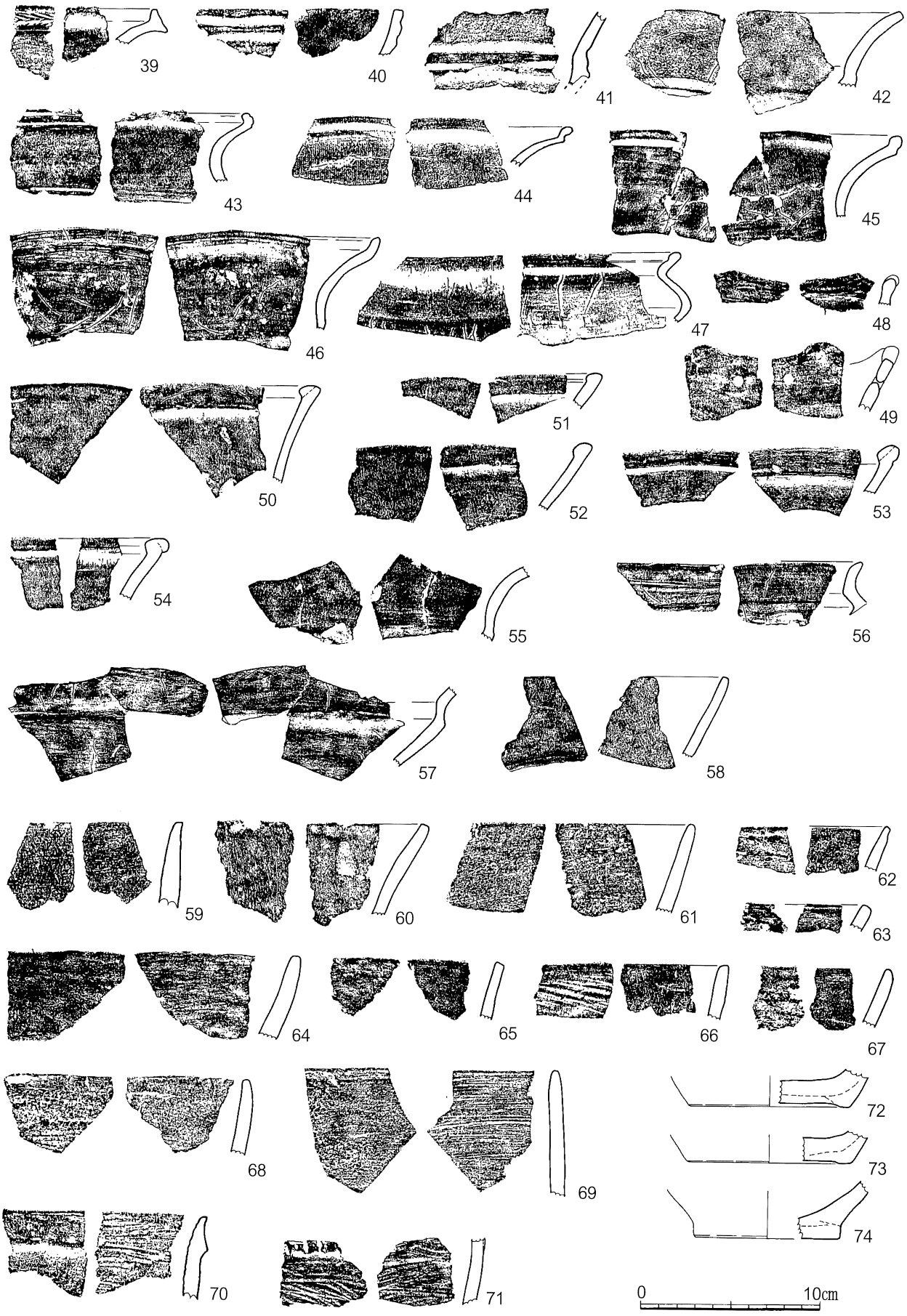
Ⅴ層の石核石器・剥片石器（第14図1～3・第15図4～16・第16図17～26・第17図27～35）

1は一部に円礫面を残す剥片で、削器的用途に使用している。2は偏平打製石器によく使われる石材であるが、少し二次加工を加えて、削器としている。3は板状の厚い原石を打ち割って作った剥片の一部に剥離を加えて尖らせ、礫器としている。4は片面に円礫面をもつ剥片を用いた削器である。下端は欠損している。5は打製石鏃。6は灰色のチャートで二次加工のある削器。7は片面に礫面を残す削器。8は赤茶色の斑部のある灰色のチャート剥片に使用痕がつく。9は1側辺に二次加工した削器で、欠損している。10は削器。11は灰色のチャート削器。12は流紋岩の剥片で、使用痕がつく。13は使用痕のある剥片。14は上下両端からの二次的な剥離をもつ剥片。楔形石器。15は流紋岩製で、左図の右下に欠損した錐の刃部があったものか。16は流紋岩製で、厚い剥片を加工した削器であ

Ⅰ区晩期遺物出土状況

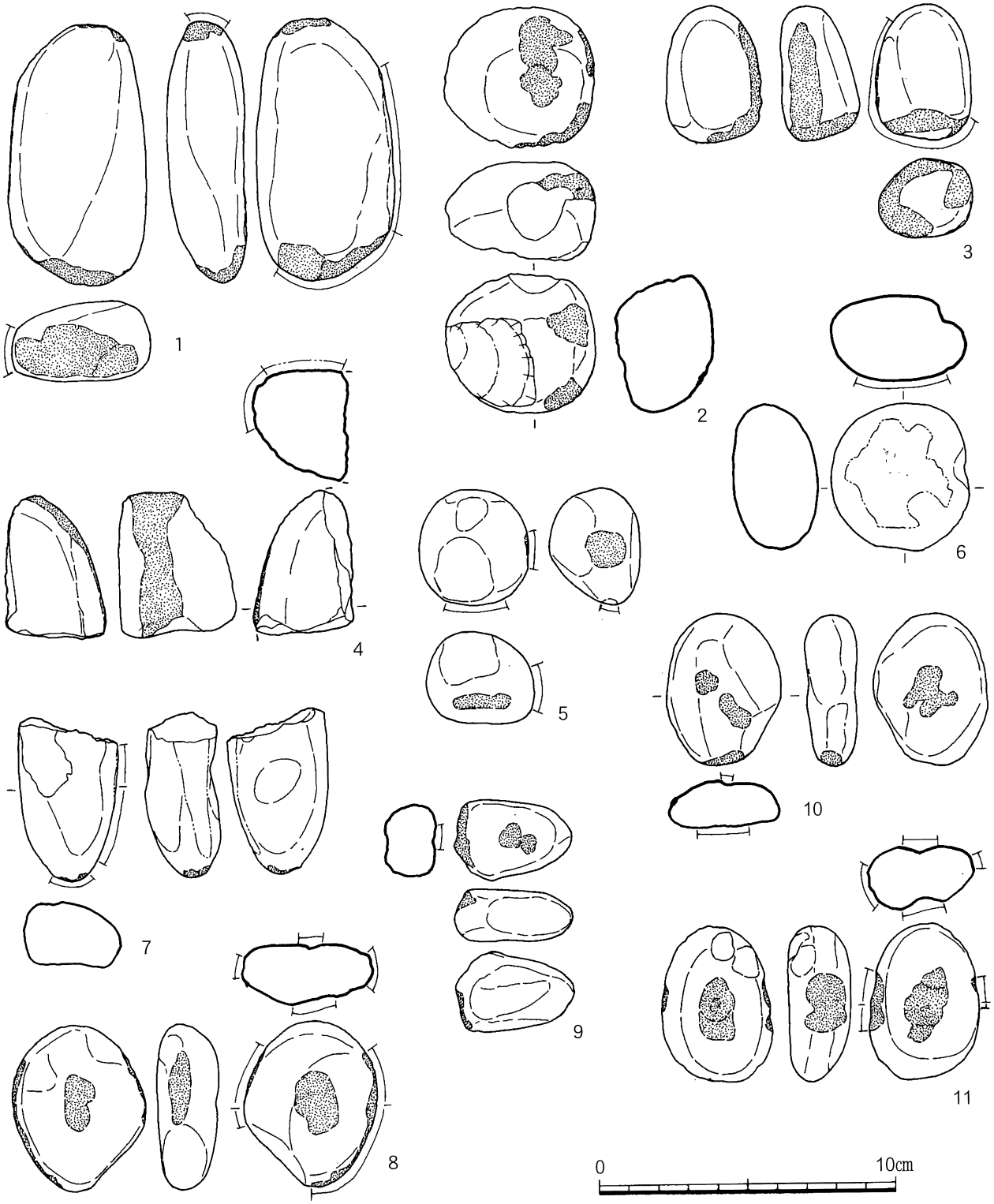
瘤付き土器出土状況

縄文時代の石器

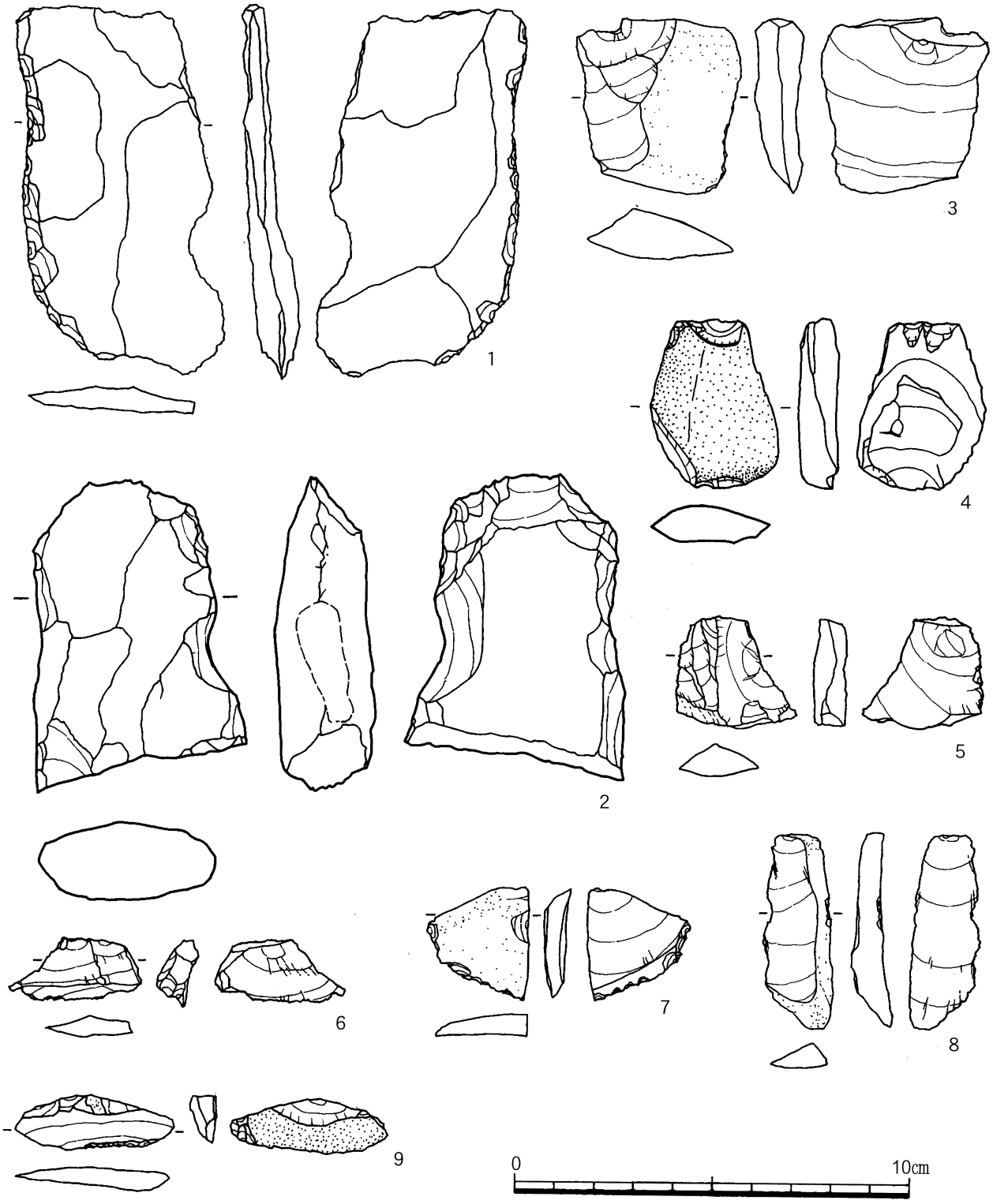


第11図　縄文時代の土器実測図

る。17・18は円礫面を打面とした剥片である。19・20は剥片。21は流紋岩製剥片で、二次加工はない。23は剥片で二次加工はない。24は縦長剥片の下部が欠損したもの。25は使用痕のある剥片。26は使用痕ある剥片27は使用痕のある剥片。28は片面に円礫面を残す縦長剥片。1側辺に使用痕がある。29は剥片を折断し、二次加工を加えて削器としている。30は使用痕ある剥片。31は片面に円礫面をもつ剥片で、上下端部に二次的剥離がある。32は円礫面をもつ剥片。33は剥片。34・35も円礫面をもつ剥片。



第12図　縄文時代遺物包含層出土石器



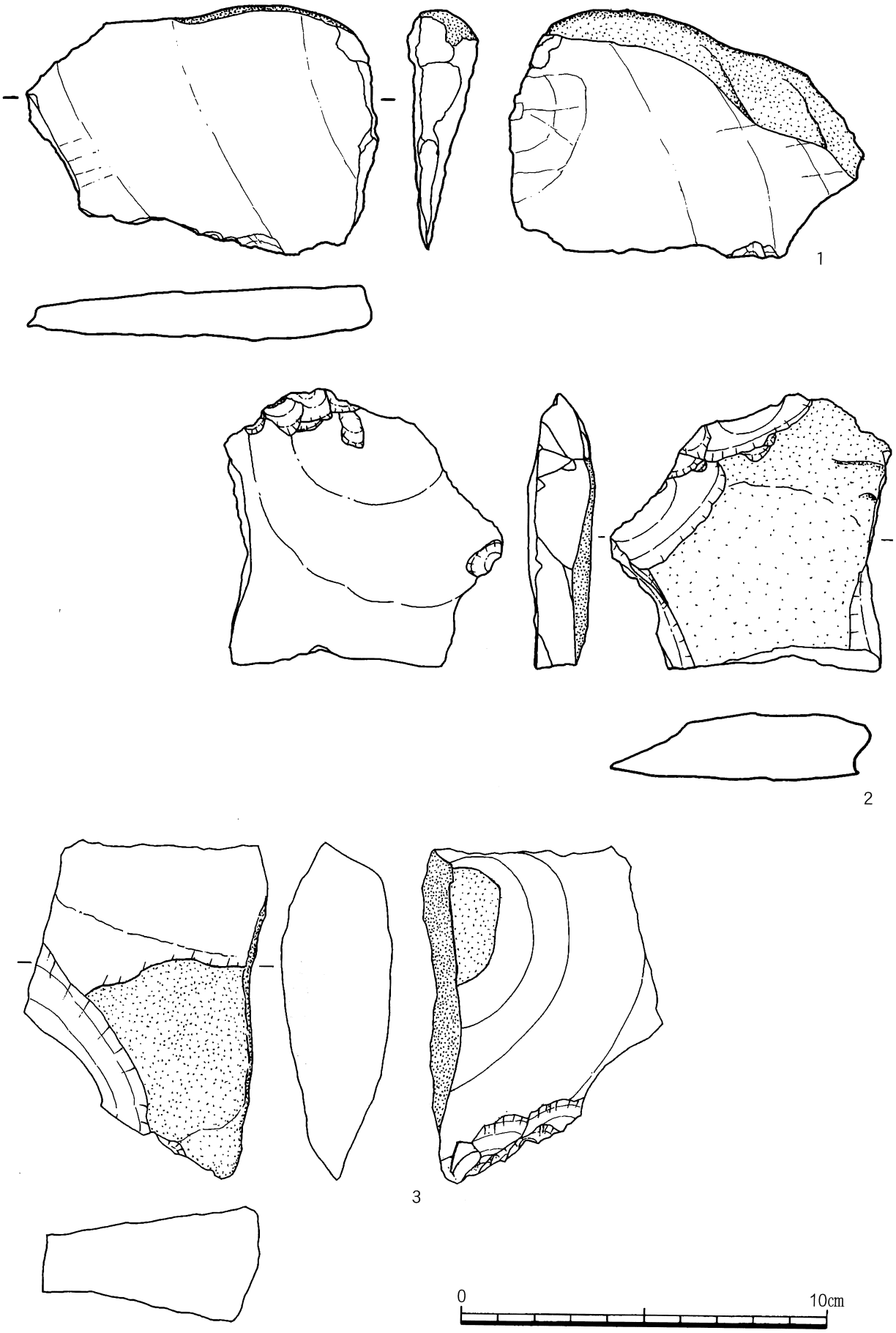
第13図　Ⅰ区Ⅲ層出土石器（2/3）

縄文時代石器観察表

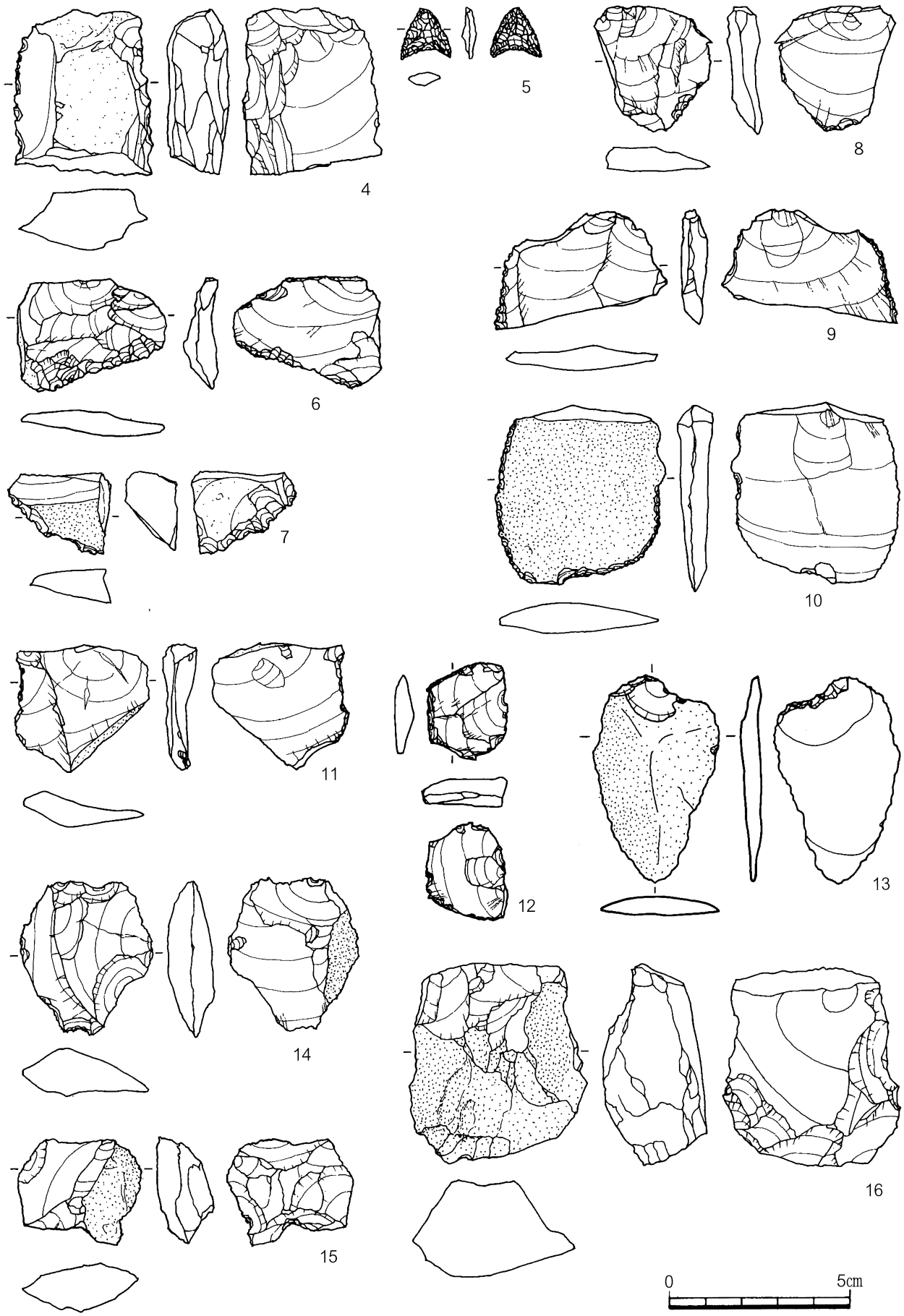
※単位はcm・g（以下同じ）

図番号	出土地区	出土層	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石材	備考
第12図1	4C区	V	磨石・敲石	17.4	9.3	5.3	1143.8		
第12図2	4C区	V	敲石	10.0	9.3	6.7	697.1		
第12図3	4C区	V	敲石	9.0	6.3	5.2	354.9		
第12図4	4C区	V	磨石・敲石	9.8	7.8	6.7	470.9		
第12図5	8A区	Ⅲ	敲石	7.8	7.2	6.1	451.2		
第12図6	7B区	Ⅲ	磨石	9.9	9.4	5.7	675.9		
第12図7	4C区	V	磨石・敲石	11.0	6.7	4.9	418.1		
第12図8	4C区	V	敲石	11.1	9.3	4.1	440.0		
第12図9	4C区	V	敲石	7.9	5.3	3.5	167.6		
第12図10	4C区	V	敲石	10.2	7.6	3.5	310.7		
第12図11	3B区	V2	敲石	10.5	7.4	4.3	355.2		

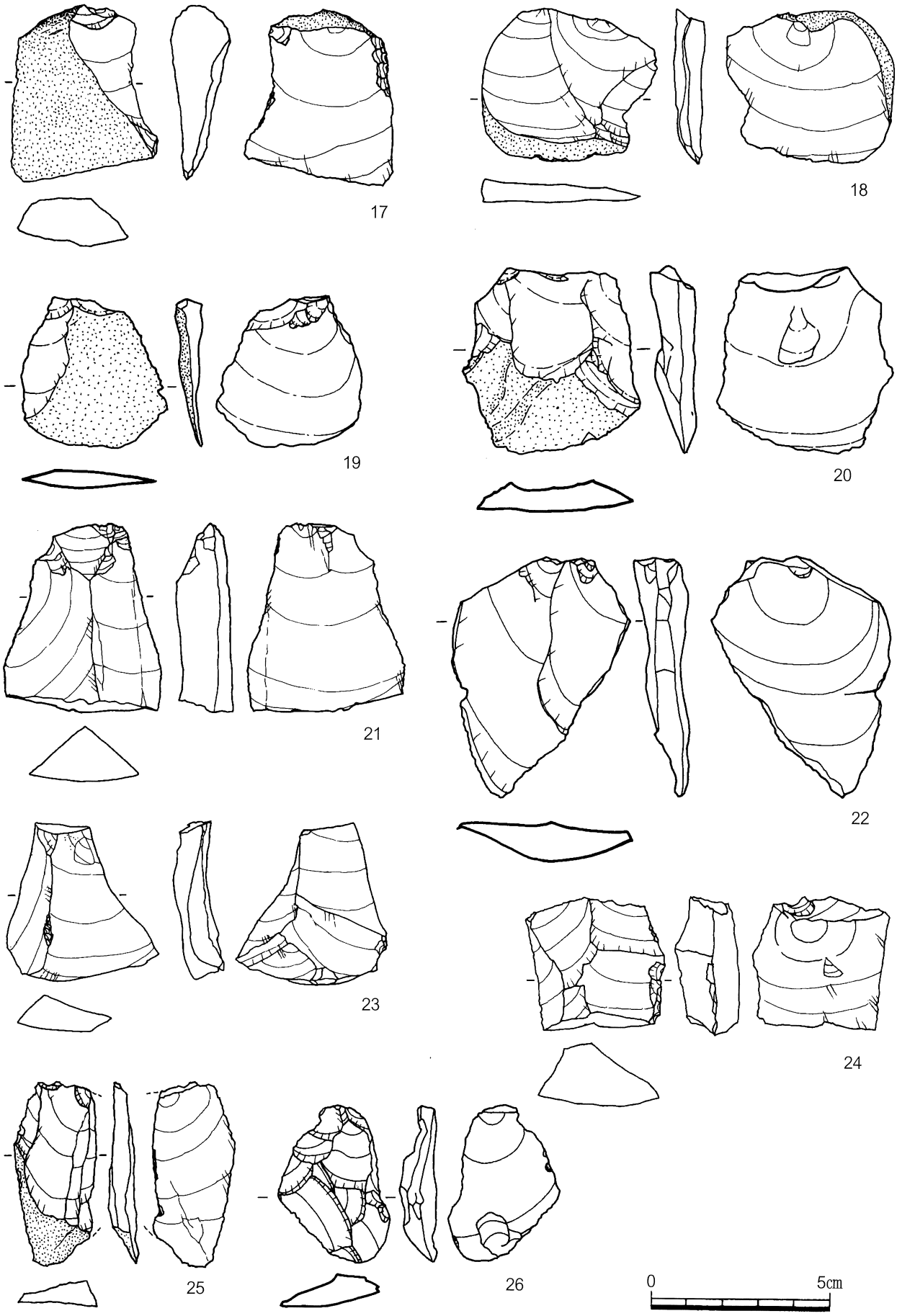
上空から見た炭竈遺跡



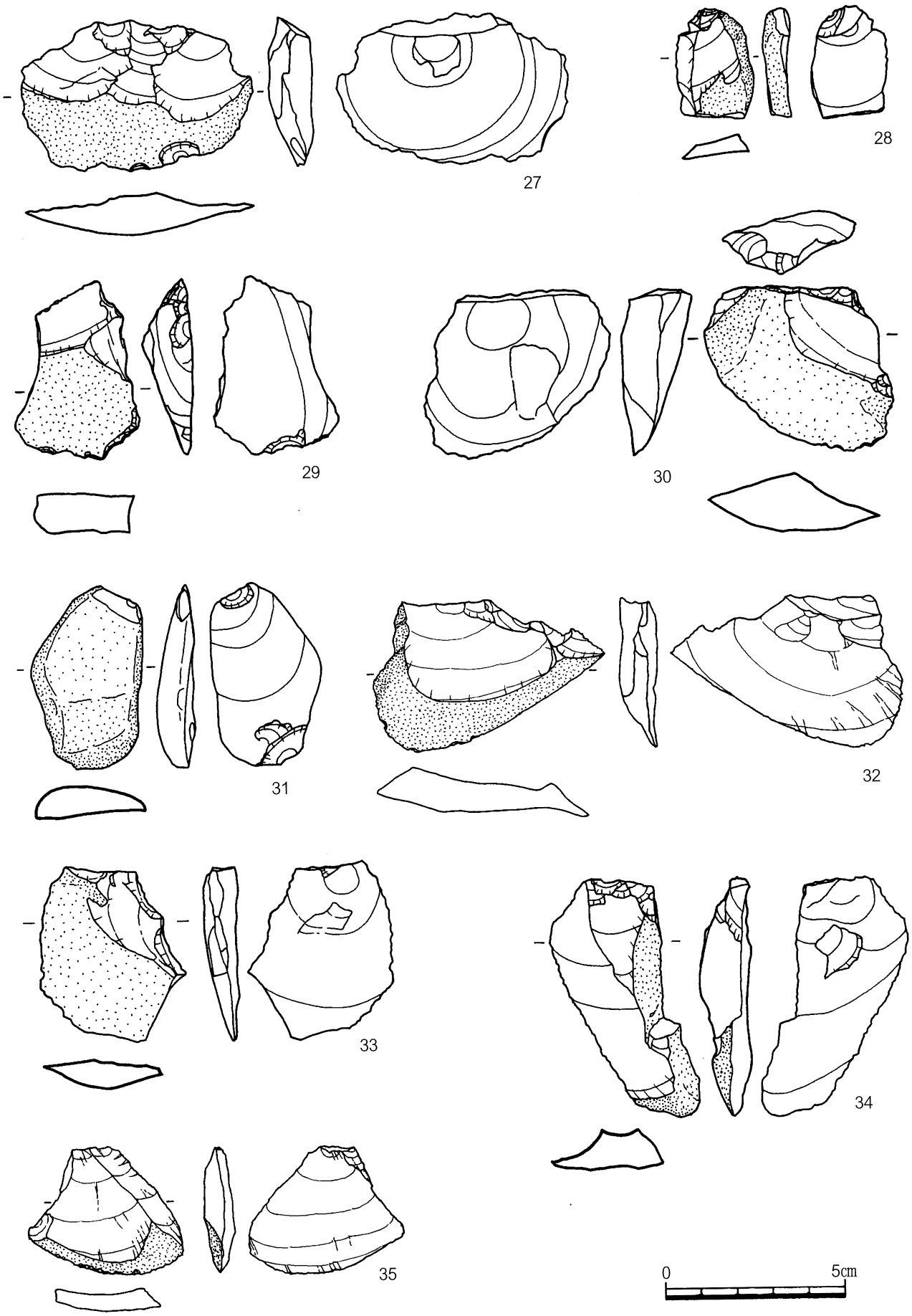
第14図　Ⅰ区Ⅴ層出土石器（2/3）



第15図　Ⅰ区Ⅴ層出土石器（2/3）



第16図　Ⅰ区Ⅴ層出土石器（2/3）



第17図　Ⅰ区Ⅴ層出土石器（2/3）

縄文時代石器観察表

図番号	出土地区	出土層	器種	長さ	幅	厚さ	重量	石材	備考
第13図1	7C区	Ⅲ	削器	9.2	5.0	1.1	41.4		
第13図2	5C区	Ⅲ	偏平打製石器	8.0	5.6	2.5	127.9		
第13図3	7B区	Ⅲ	使用痕ある剥片	5.5	4.2	1.2	22.5		
第13図4	7B区	Ⅲ	楔形石器	4.3	3.3	1.0	18.1		
第13図5	7B区	Ⅲ	使用痕ある剥片	2.3	3.1	0.9	6.1		
第13図6	8B区	Ⅲ	剥片	1.6	0.9	3.4	3.3		
第13図7	8A区	Ⅲ	削器	2.9	2.6	0.6	4.2		
第13図8	4C区	Ⅲ	使用痕ある剥片	4.9	1.7	1.0	6.9		
第14図9	4C区	Ⅲ	削器	4.0	1.4	0.7	3.4		
第14図1	3C区	V1	使用痕ある剥片	9.7	6.5	2.0	114.3		
第14図2	3C区	V	削器	7.5	7.5	1.8	136.9		
第14図3	3C区	V2	礫器	9.1	6.6	3.0	203.9		
第15図4	3C区	V1	削器	4.5	3.8	1.7	36.7		
第15図5	3C区	V2	打製石鏃	1.4	1.4	0.4	0.4		
第15図6	3C区	V	削器	4.1	3.0	1.0	9.0		
第15図7	3C区	V1	削器	2.8	2.2	1.4	6.3		
第15図8	3C区	V	使用痕ある剥片	3.5	3.3	0.9	8.4		
第15図9	3C区	V	削器	4.8	3.2	0.7	10.5		
第15図10	4C区	V	削器	4.9	4.7	1.0	20.0		
第15図11	4C区	V	削器	3.7	3.5	0.9	9.1		
第15図12	3C区	V	使用痕ある剥片	2.7	2.2	0.8	4.5		
第15図13	4C区	V	使用痕ある剥片	5.7	3.5	0.5			
第15図14	4C区	V	楔形石器	4.3	3.1	1.7	16.4		
第15図15	3C区	V2	錐？	3.4	2.9	1.5	12.9		
第15図16	3C区	V	削器	5.5	4.9	2.8	80.9		
第16図17	4C区	V	剥片	4.8	4.1	1.7	27.5		
第16図18	4C区	V	剥片	4.8	4.2	0.8	15.7		
第16図19	4C区	V	剥片	4.2	4.1	0.3	9.8		
第16図20	4C区	V	剥片	5.1	4.8	1.1	26.4		
第16図21	3C区	V	剥片	5.2	4.4	1.5	32.6		
第16図22	3C区	V	剥片	6.7	4.9	1.0	32.0		
第16図23	4C区	V	剥片	4.4	4.3	1.1	17.0		
第16図24	3C区	V2	剥片	3.6	3.6	1.8	23.1		
第16図25	3C区	V	使用痕ある剥片	5.1	2.3	0.8	7.0		
第16図26	3C区	V2	使用痕ある剥片	4.4	3.1	1.0			
第17図27	4C区	V2	使用痕ある剥片	6.4	4.1	1.2	29.8		
第17図28	3C区	V1	使用痕ある剥片	3.1	2.2	0.7	5.9		
第17図29	4C区	V	削器	5.0	3.5	1.4	23.0		
第17図30	4C区	V	使用痕ある剥片	5.2	4.6	1.7	37.3		
第17図31	4C区	V	二次加工ある剥片	5.1	3.1	1.1	19.4		

第17図32	３Ｃ区	Ｖ	剥片	6.4	4.2	1.1	21.4
第17図33	４Ｃ区	Ｖ	剥片	4.9	4.1	0.9	16.5
第17図34	４Ｃ区	Ｖ	剥片	6.7	3.1	1.5	24.0
第17図35	４Ｃ	Ｖ	剥片	4.3	3.6	0.8	10.3

東から見た炭竈遺跡

4．弥生・古墳時代の調査

Ⅰ区の西部には弥生時代と古墳時代の竪穴住居跡群・土坑が分布し、Ⅰ区中央部やや東寄りには1条の溝状遺構を検出した。弥生・古墳時代にまたがるが、1号竪穴住居跡から順に説明していく。

1号竪穴住居跡（第18図）

1号住居跡完掘状況

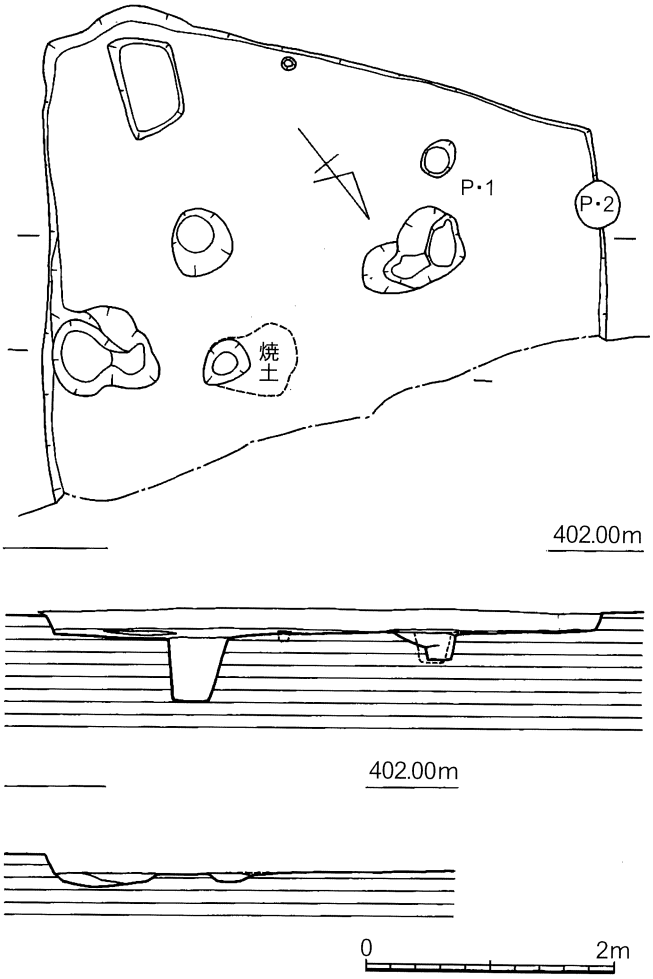
調査区の北西端で検出した方形の住居である。南辺は4.6mほどあることがわかったが、東辺は3.7m、西辺は1.6mだけが調査区内にあり、全容はつかめない。南端の長方形土坑、P・1とP・2は後世の撹乱である。床面東部の破線内は焼けた土の分布範囲である。炉の跡であろう。

出土遺物（第19図）

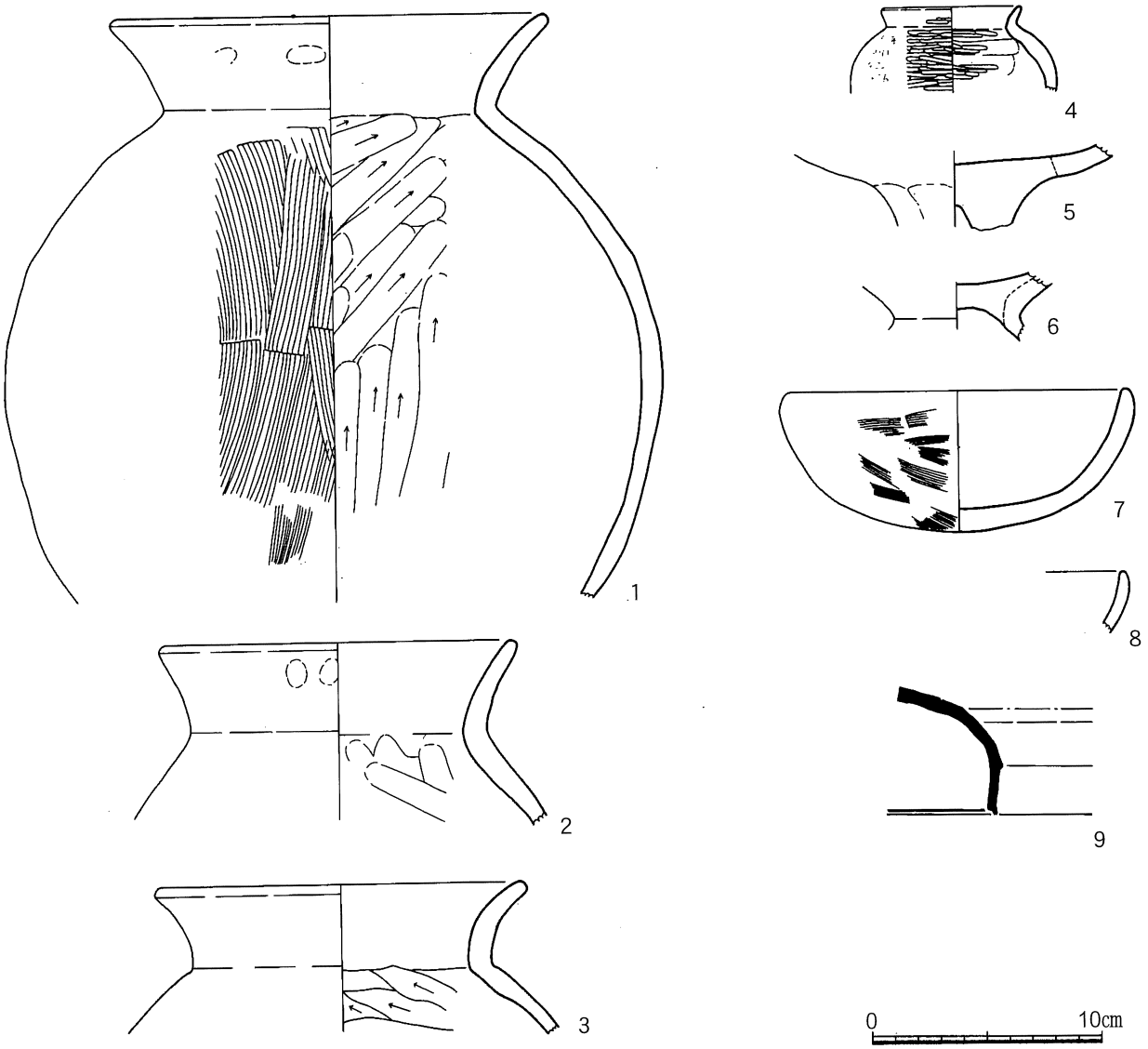
覆土内から小破片がかなり出土したが、まとまった状態のものはみられなかった。

土師器（第19図1～8）

1～3は甕形土器である。1は復元口径19.0cm、現状で高さ25.2cmを測る。胴部は膨らみ、頸部でしまり、口縁部は外湾しつつ開く。口縁部の内外面がヨコナデ、胴部外面は縦方向のハケ目、内面はヘラ削りである。胎土に角閃石と長石を多量に含む。肩より下にススが付着する。2は復元口径15.5cmを測り、口縁部は1に似ている。口縁部の内外面はヨコナデ、肩部はナデ調整で、胴部内面は指ナデしている。3は復元口径16.1cmを測り、口縁部は比較的に強く外湾している。口縁部内外面はヨコナデ、肩部はナデ、胴部内面はヘラ削りしている。4は小型壺で、復元口径6.1cm・胴部



第18図　1号住居跡実測図（1/60）



第19図　１号住居跡出土土器

最大径9.0㎝を測る。口縁部内外面はヨコナデ、胴部は横方向にヘラ磨きしている。胎土に精製粘土を使う。５・６は高坏形土器である。坏部内面は磨き、外面はナデ、脚部に指圧痕がつく。７・８は坏形土器である。７は復元口径14.8㎝・器高6.1㎝を測る。器面調整は内面はヨコナデ、外面は上部はヨコナデ、下方はヨコハケ。８は内外面ともヨコナデ後、全面に赤色顔料を塗っている。

須恵器（第19図９）

９は杯蓋である。口唇部には段があり、下端から2.1㎝のところに突出部がめぐる。外面の一点鎖線より上は回転ヘラ削りしている。ここから下は自然釉がかかり、この須恵器は黒色～黒灰色を呈する。

２号竪穴住居跡（第20図）

調査区の北西部で検出した。１号竪穴住居跡に切られ、その新旧関係は明白であった。壁は南東側の１辺4.9ｍのみが調査区内にある。深さは最大で30㎝あり、床面には５ケ所に掘り込みが認められたが、Ｐ・１～３のうちのどれかが主柱穴らしい。点線の範囲内には炭化物がやや厚く分布していた。竪穴の覆土内からは、図示したように４点の磨石類を含む礫が15個出土した。ある程度埋まった段階

で周囲から投げ棄てられたものであろう。

出土遺物（第21図・第22図）

弥生式土器（第21図１）

１は大野川流域特有の甕形土器で、器面調整はヨコナデ、頸部に櫛描き文をもつ。胎土に角閃石と長石が多く、茶褐色を呈する。

石器（第22図１～４）

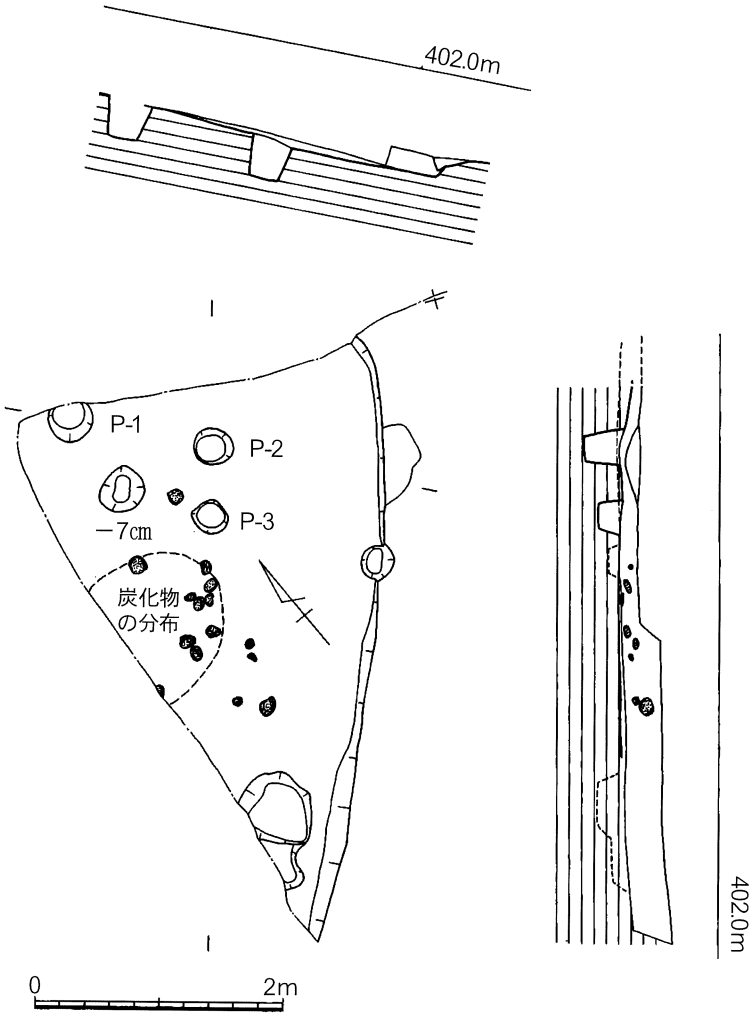
１は全体を使用面にした磨石である。一部を欠損している。２～３は一部分を敲石（たたきいし）として利用している。

３号竪穴住居跡（第23図）

調査区の南西端部にあり、４号竪穴住居跡を切っている。北壁が2.8ｍほど、東壁が1.8ｍほど調査区内にあり、南側は撹乱されて床面と壁を失っていた。北部で最も深く、25㎝を測る。床面の南部の点線で示す範囲は炭化物が分布していた。柱穴は深さ50㎝の１個を検出した。　出土遺物（第24図・第25図）

弥生式土器（第24図１）

１は二重口縁壺形土器の口縁部で、



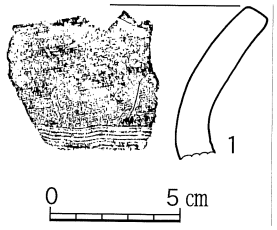
第20図　２号住居跡実測図（1/60）

２号竪穴住居跡

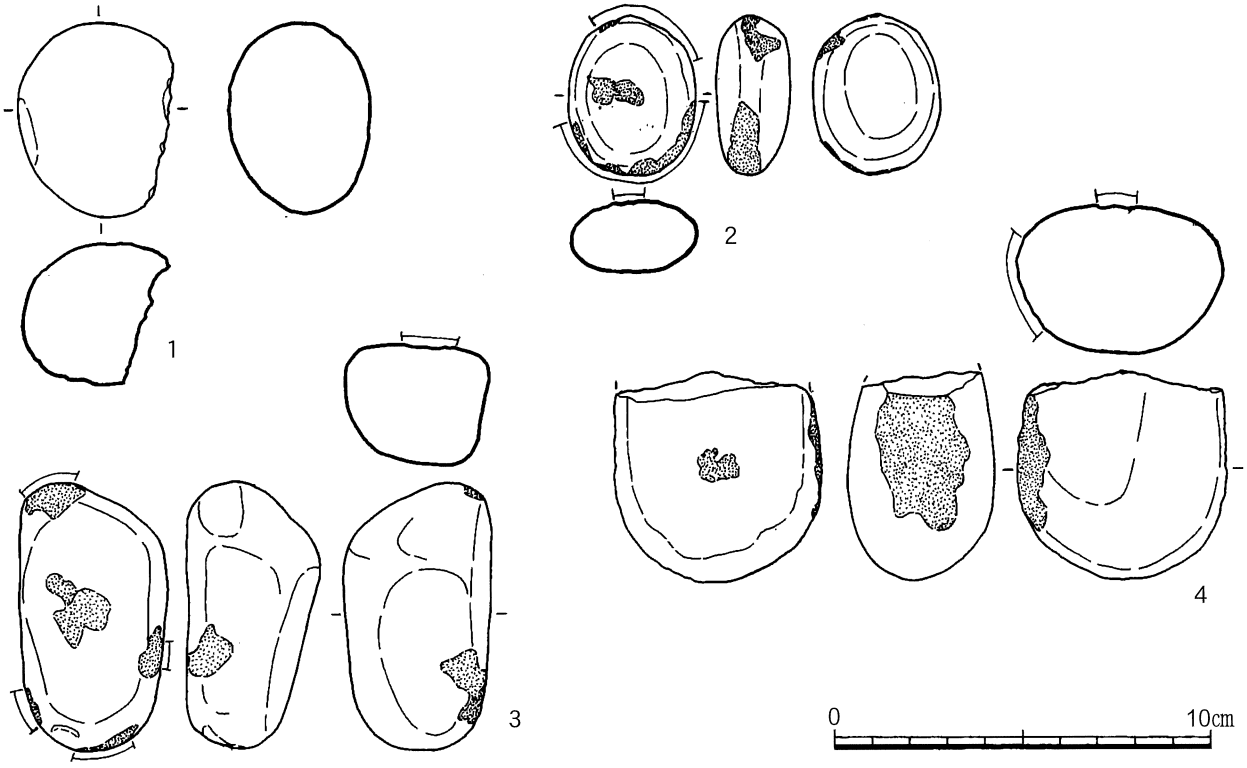
復元口径18.8㎝を測る。外面に櫛描き波状文を３単位施している。

石器（第25図1・2）

１は円盤状の礫の周縁部を敲打具として使い、そのため一部は剥落している。２は広い



第21図　２号住居跡出土土器



第22図　２号住居跡出土石器

一面と両側面に磨石としての平坦な使用痕が認められる。

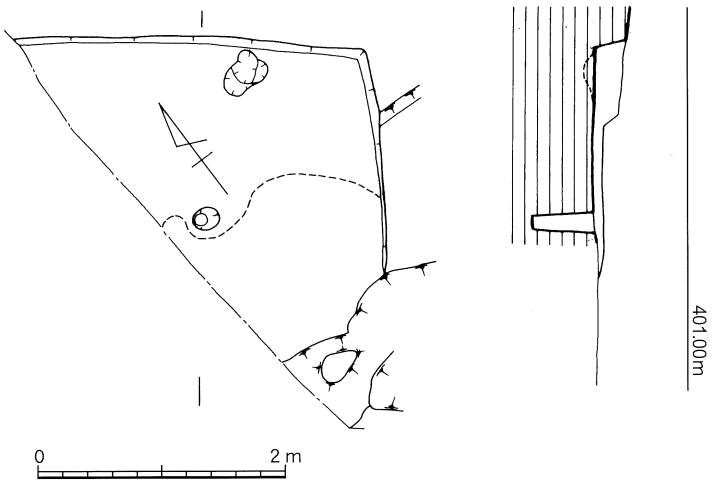
４号竪穴住居跡（第26図）

調査区の南西部にあり、３号住居跡に切られている。北壁は約3.9m、東壁は南部で曲がりつつあり、隅部に近いところまで6.5mが調査区内に現れている。壁は最大高さ53cmを測る。床面で９個の柱穴を検出した。床面やや北寄りに炭化物の分布するところがある(図の破線内)。

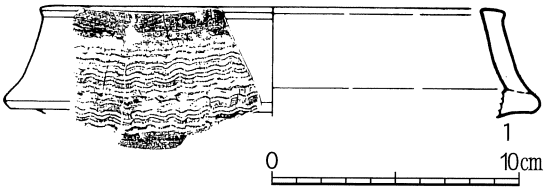
出土遺物（第27図・第28図・第29図）

弥生式土器（第図１～９）

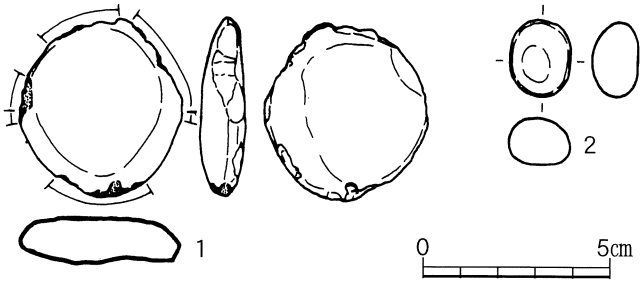
１・２は二重口縁の壺形土器の口縁部である。１は口径18.1cm。短い口縁部外面には、向かって右から左の方向に櫛描き波状文が１段巡る。２の口縁部はやや長い。口径17.1cm。外面に３段、櫛描き波状文が巡る。３～９は甕形土器である。３は復元口径20.5cm、口縁部は緩やかに外湾し、内外面はヨコナデ調整。胎土に赤色粒子を少し含む点が特徴的である。４は口縁部内面をヨコハケし外面をタテ



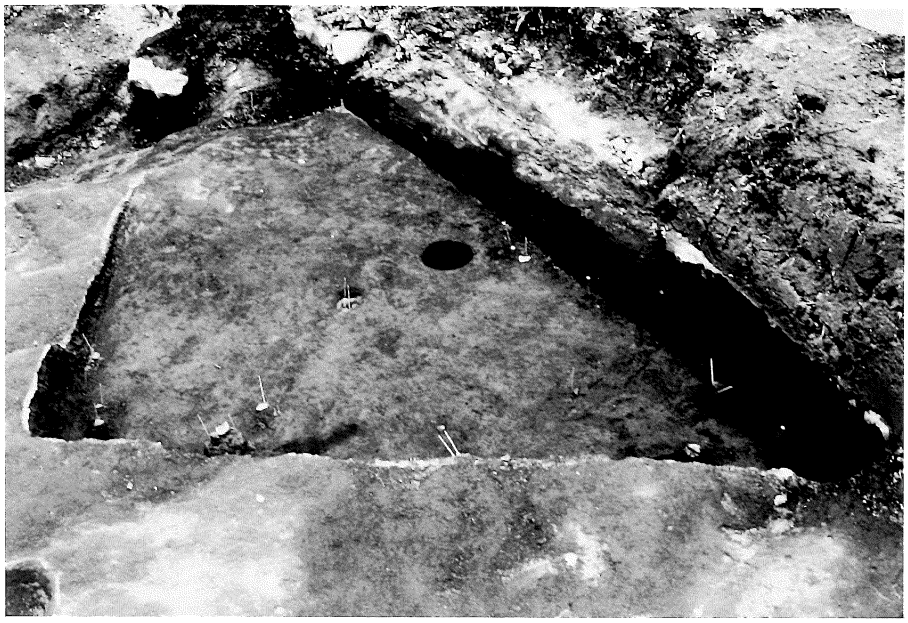
第23図　３号住居跡実測図



第24図　３号住居跡出土遺物実測図



第25図　３号住居跡出土石器


３号住居跡完掘状況

４号住居跡完掘状況

ハケしたあと、ヨコナデしている。胴部内面はナデ、外面はタテハケ。復元口径16.2㎝。５は内外面とも板状工具による縦方向のナデ調整が行われている。底部下端は指押さえしている。底径3.5㎝。胎土の特徴として金色の雲母を微量含んでいる。６～８は大野川流域に一般的な刷毛目をもちいない粗製甕形土器である。６は全面ナデ調整で、1/8破片から復元したものである。口径21.1㎝。頸部に２条の断面三角の突帯が巡る。胎土に角閃石と長石を多量に含んでいる。７は「工字状突帯」の甕で、すべてナデ調整。胎土に角閃石と長石を多量に含む。８は櫛描きにより上部に横方向、下部に波状文が描かれている。角閃石と長石はすくない。９は内外面ヨコナデ調整で、口縁端部は折れ曲がり刻み目をもつ。

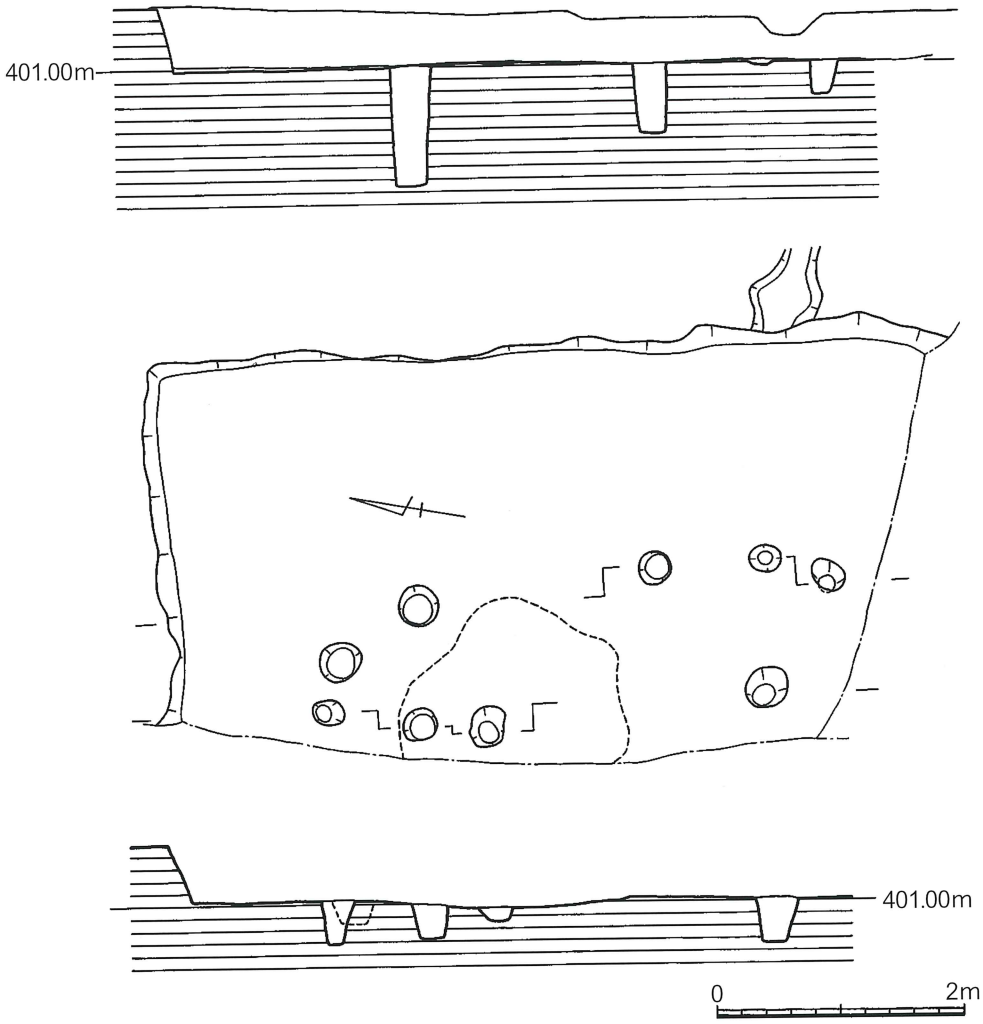
石器（第28図１～12・第29図１）

第28図１～12は磨製石鏃

（２～５）とその未製品である。
第29図１は細かな質の褐色の砂岩で、平たい２面と上下面は人為的な平坦面になっている。断面は上が薄く、下は厚い。砥石あるいは擦切り石器であろうか。

５号竪穴住居跡（第30図）

住居跡群の中では南東端に位置するもので、かつ最大規模をもつ。南壁と西壁の半分ほどが調査区外に出ている。床の最大深さは50㎝で、南北軸約7.7ｍ・東西軸約7.2ｍを測る。床面には11個の柱穴があるが、本来４本柱であるところを各々斜めに配置する２本で対応させている。中央部にも柱穴がみられる。このような柱配列は大野川流域でも中流から上流域に分布する。覆土内の７か所に焼土が分布し、焼土の下面は床面直上に堆積しており本竪穴遺構は燃えてしまったようである。床面南部には17個の円礫が集まった状態で出土し、使用状態あるいは保管状態を示すものであろう。



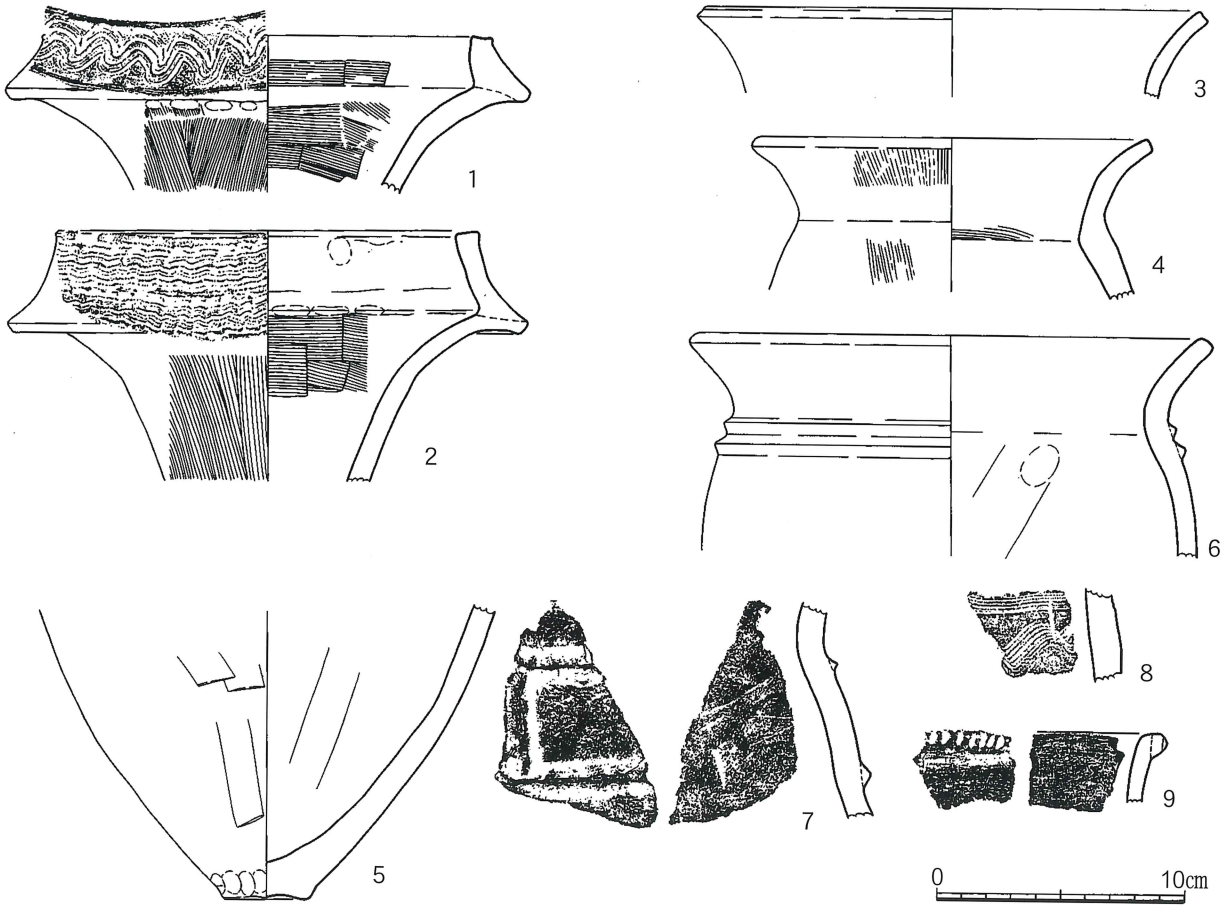
第26図　４号住居跡実測図（1/60）

出土遺物（第31図・第32図）

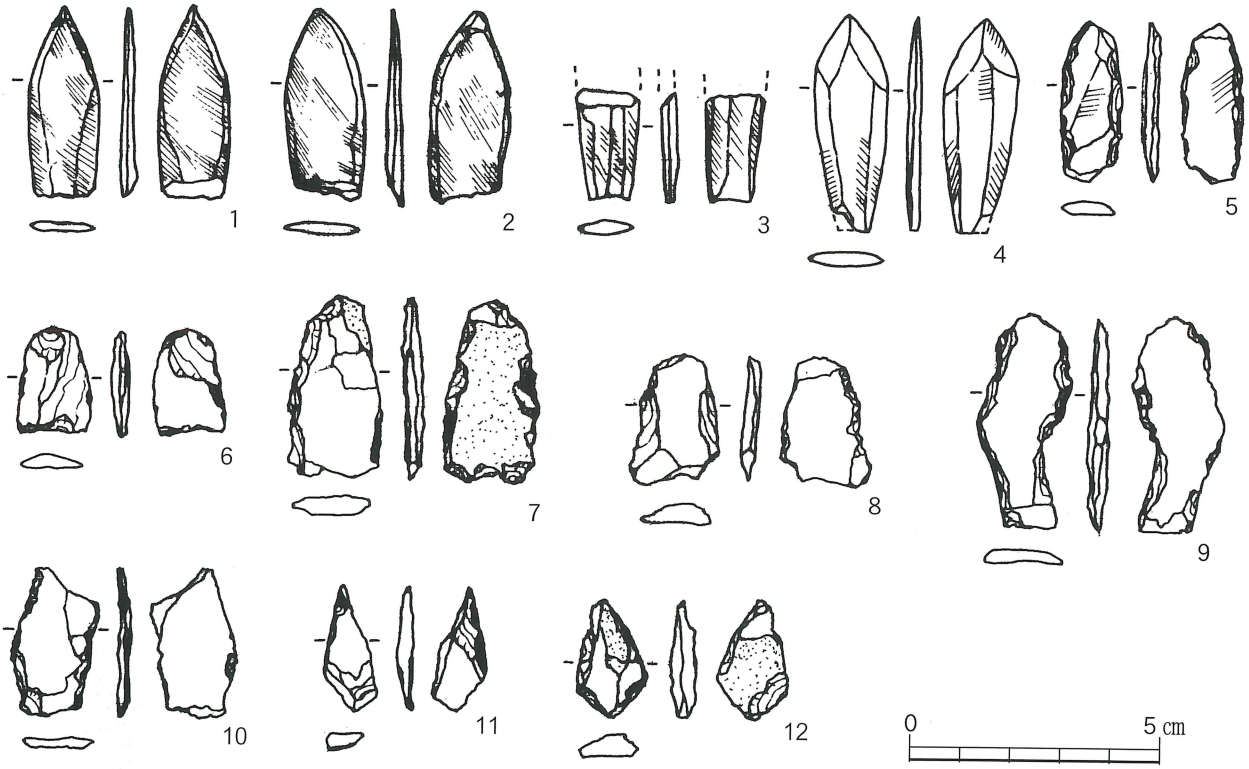
焼けた竪穴の割には、完形に復元できる土器の出土がないので、本住居は意図的な焼却が行われた可能性がある。

弥生式土器（第31図１～12）

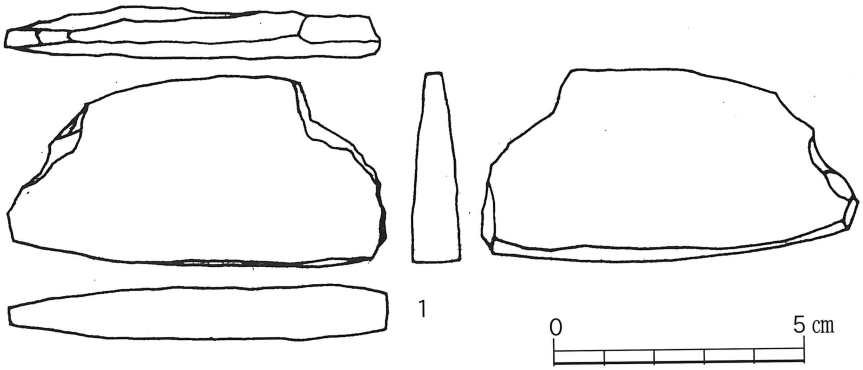
１～３・10・12は壺形土器である。１・３は二重口縁で、１は櫛描き波状文が２段ある。胎土に砂粒が多い。２は胴部破片で外面はハケメ調整と刻み目突帯が認められる。下の刻み目はハケ具により、上は別のものによる。胎土に石英が多い。３は14個の破片が存在した。太い刷毛具で口縁部内面と外面頸部を調整し、外には細いハケメも追加されている。口唇部に円形浮文がつく。胎土に砂粒が多い。押し引きのような櫛描き文が２段ある。復元口径19.1㎝。10は器面をナデ調整し、胎土に角閃石と長石を多量に含む。12は小型品で、器面調整は外底面ナデ、外面下部はヘラ削り、上部はヘラ磨き、内面は底に指圧痕があり、その他はヘラナデ。最大径15.2㎝。４～９・11は甕形土器。４は両面ヨコナ



第27図　４号住居跡出土遺物実測図



第28図　４号住居跡出土磨製石鏃・同未製品（2/3）

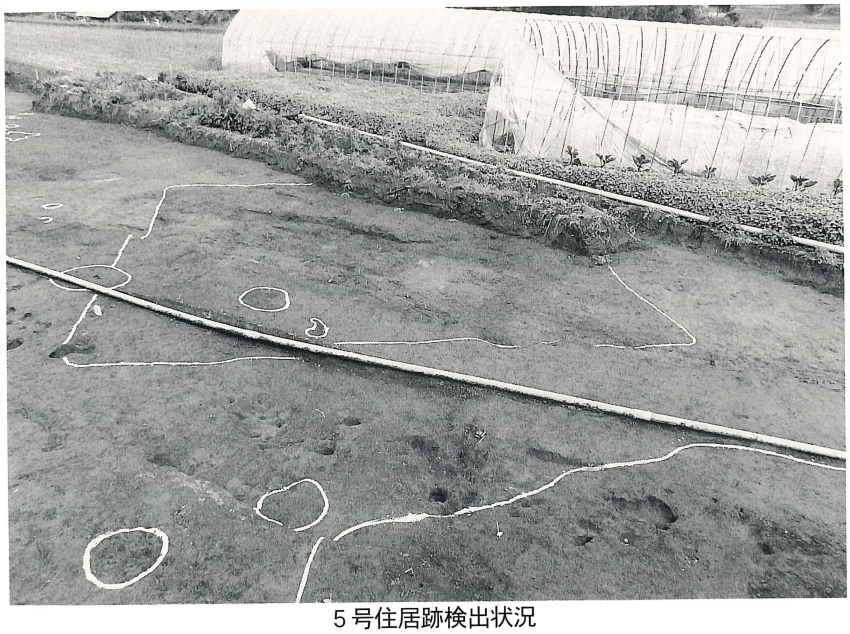


第29図　４号住居跡出土石器

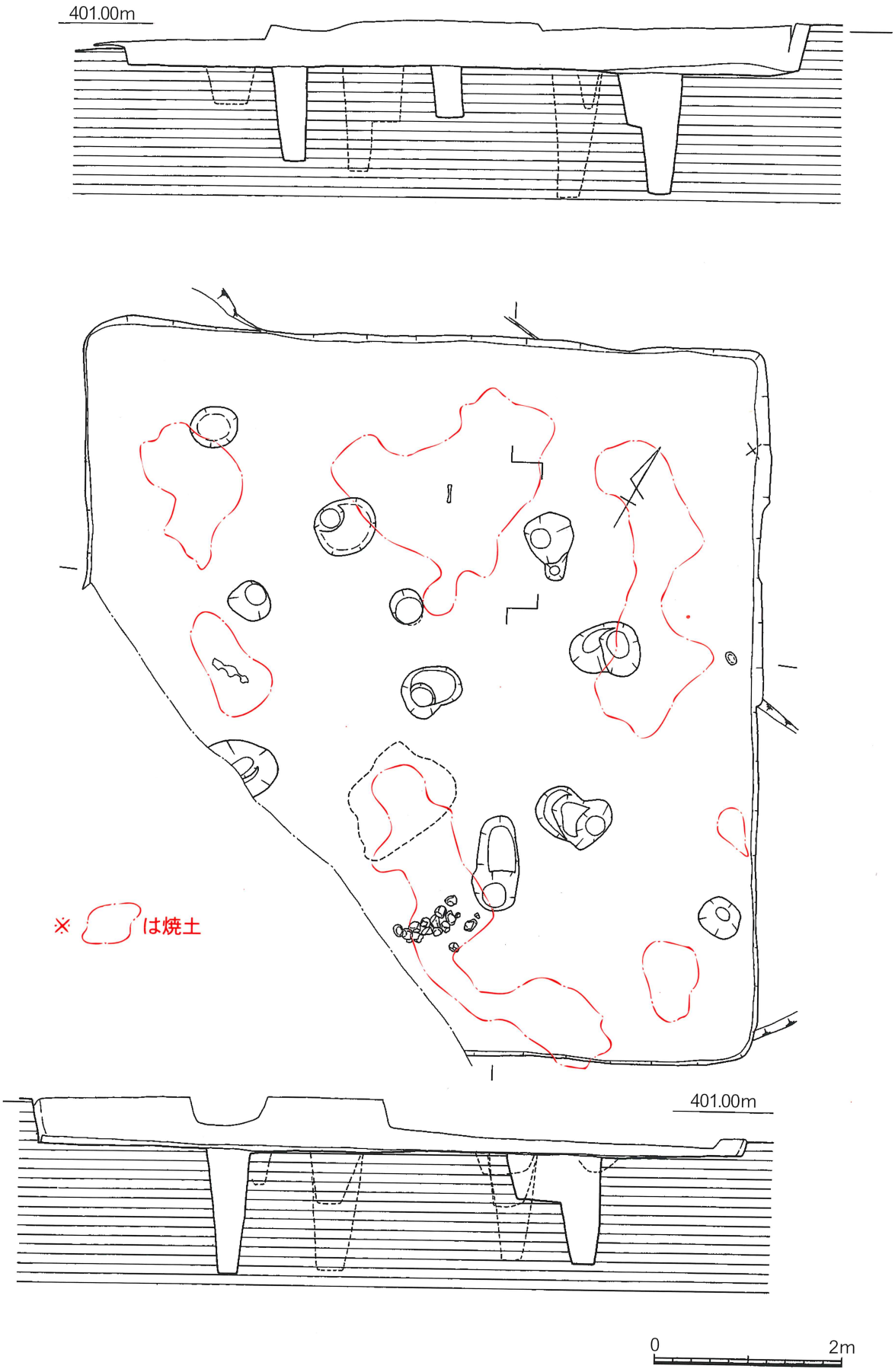
デ調整。５・６は同一個体で「工字突帯」土器である。器面はナデ調整している。胎土中に角閃石と長石が多い。胴部最大径29.7㎝。７～９・11の器面はナデ調整である。

石器（第32図１～17）

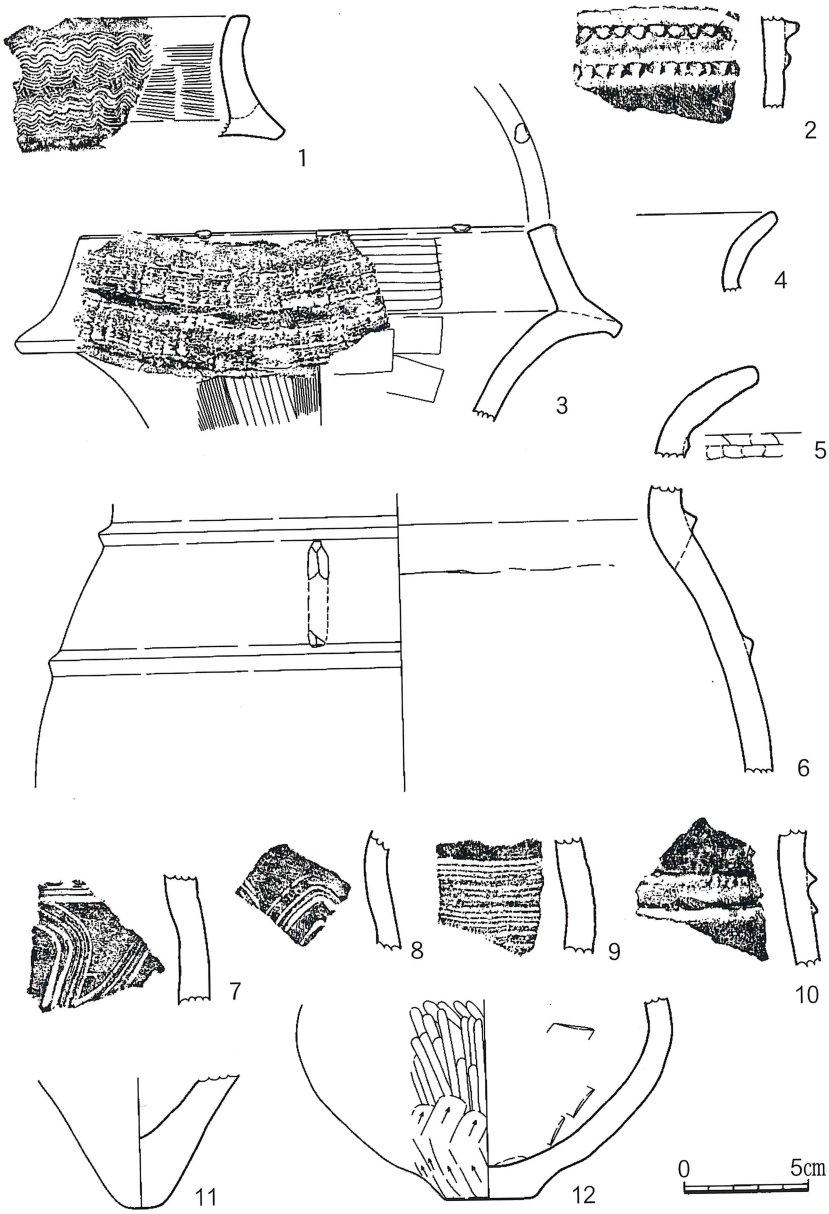
１は磨製石鏃で２～16はその未製品である。石材は１～13が緑泥片岩、14～16は赤茶色。17は使用痕のある剥片。



５号住居跡検出状況



第30図　5号住居跡実測図（1/60）



第31図　５号住居跡出土遺物実測図

第32図　５号住居跡出土磨製石鏃・同未製品・使用痕ある剥片（2/3）

6号竪穴住居跡（第33図）

5号住居跡と8号住居跡の中間に位置する。検出面の形から複数遺構の重複を想定して掘り下げたが、床面まで達しても不詳であった。北側に張り出した部分や東西の段落ちは掘り過ぎの疑いがある。平面規模は南北5.3m、東西約5mであろう。西部で深く、最大62cmを測る。床面に4個の柱穴を、また南東部に炭化物の分布する浅い凹みを検出した。

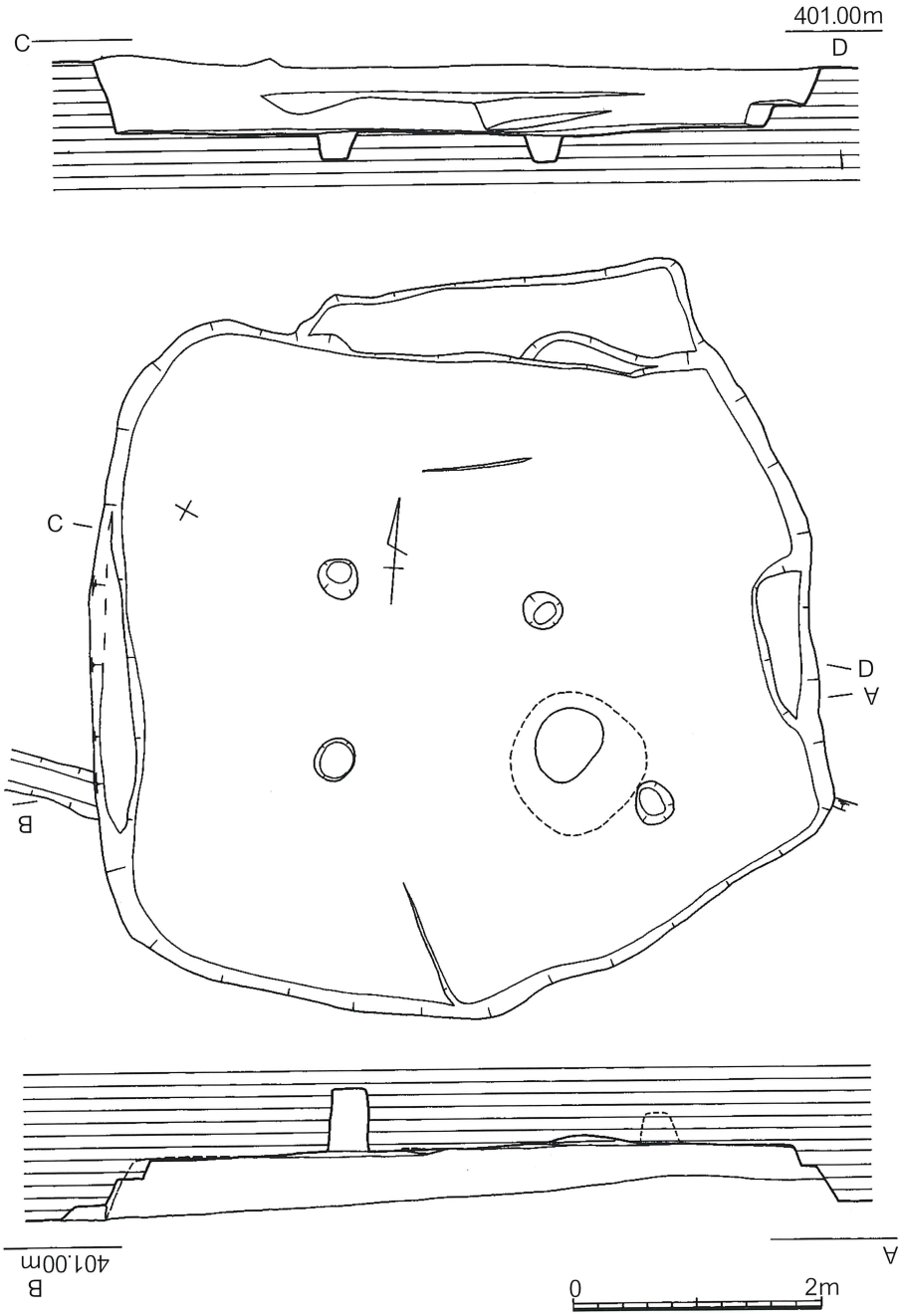
出土遺物（第33図・第35図・第36図）

完形品に近く復元できる土器2個体が出土したが、覆土上部に廃棄された状態で出土したものである。

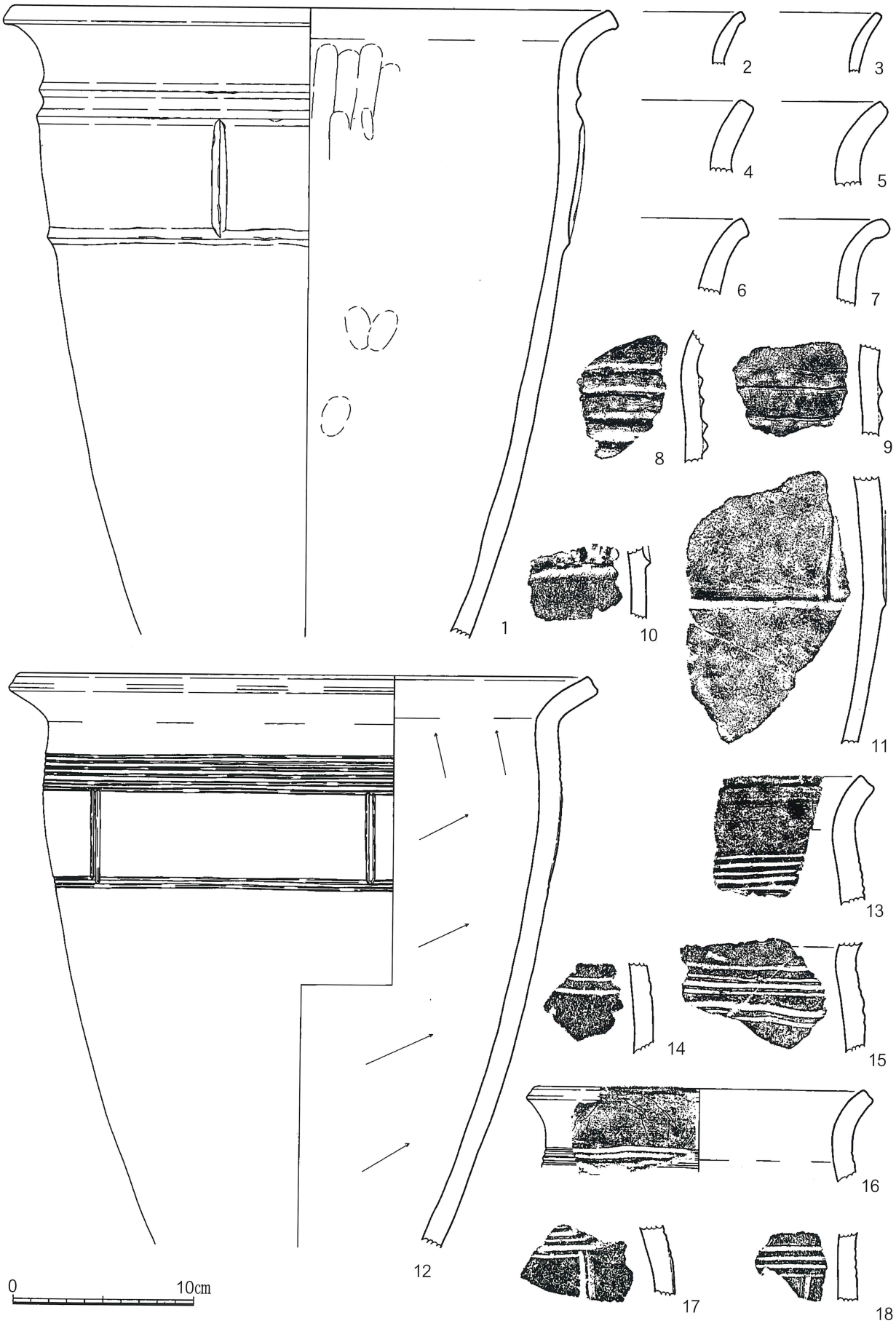
弥生式土器（第34図1～18・第35図19～23）

1～18は甕形土器。1は胴部で1/3ある破片で、復元口径34.0cm・現存高34.7cm。器面調整はナデ。頸部内面は指で縦方向にナデつけている。頸部に1条の突帯を巡らせ、その下部に「工字突帯」を貼り付けている。破片からは縦の区画数はわからない。胎土に多量の角閃石と長石を含む。突帯部を中心に外面にススが付着する。2・3は器壁が薄く胎土に角閃石・長石が少なく、4～7は器壁が厚く角閃石・長石が多い。8～11も同様である。12は復元口径32.6cm、現存高31.6cm「工字沈線」を胴上部にもつ。胴部の約1/2の破片であるが区画は4単位らしい。胎土は1と同様である。器面調整はナデ。13～18は12に類似する。

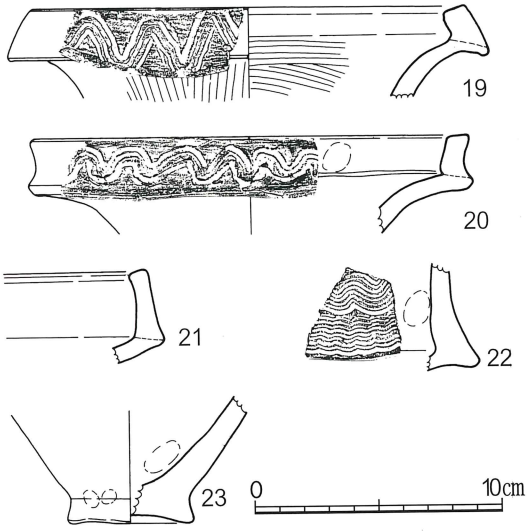
19～22は壺形土器で、胎土には角閃石・長石以外の砂粒が多い。19は内傾した短い口縁部に歯数3本の櫛による波状文が描かれている。復元口径17.6cm。20は短い外反した口縁部に歯数3本の櫛による波状文が描かれているが、19とは別の櫛状工具である。器面調整はナデのみで、ハケメは認められない。21はナデ調



第33図　6号住居跡実測図（1/60）

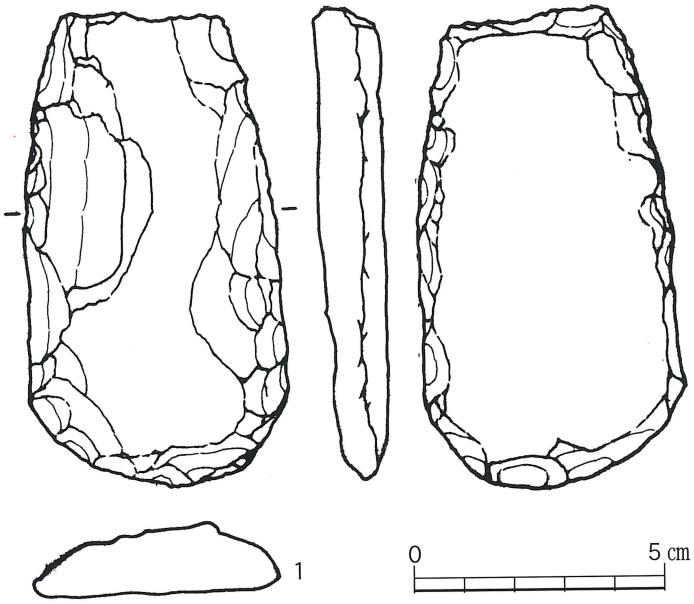


第34図　６号住居跡出土遺物実測図



第35図　6号住居跡出土遺物実測図

6号住居跡発掘状況



第36図　6号住居跡出土石器

整のみで、波状文もない。22は長い口縁部に現状で2段の櫛描き波状文が描かれている。これだけが他の遺物と比べてやや新しく、混入であろう。23は底部。器面はナデ調整と指圧痕がみられるのみである。

石器（第36図1）

土掘り具の偏平打製石器である。節理で割れた偏平な石の周縁に剥離を加えて、形態を整えている。

7号竪穴住居跡（第37図）

7号住居跡は1・4・6号住居跡に囲まれた位置にあり、8号住居跡を切っている。7・8号住居跡を検出したときの古墳時代に属する遺物の分布状態から、7号が8号よりも新しいことは分かったが、重複部分における7号住居跡の輪郭を検出することができなかった。したがって、平面形は重複していない部分しか把握できなかった。壁は南辺で長さ約3.5mを測るが、次第に床面とともに消滅しており本来はもっと長い。西辺は8号と接する位置まで1.8mを測り、延長線上に再び壁状のものが約1.2mに渡り現れる。この部分を含めれば全長5.6mとなる。床面の深さは最大で24cmを測る。柱穴・炉跡等は確認できなかった。造り付けの竈があれば確認できたと思うが、検出していないので元々なかったのであろう。

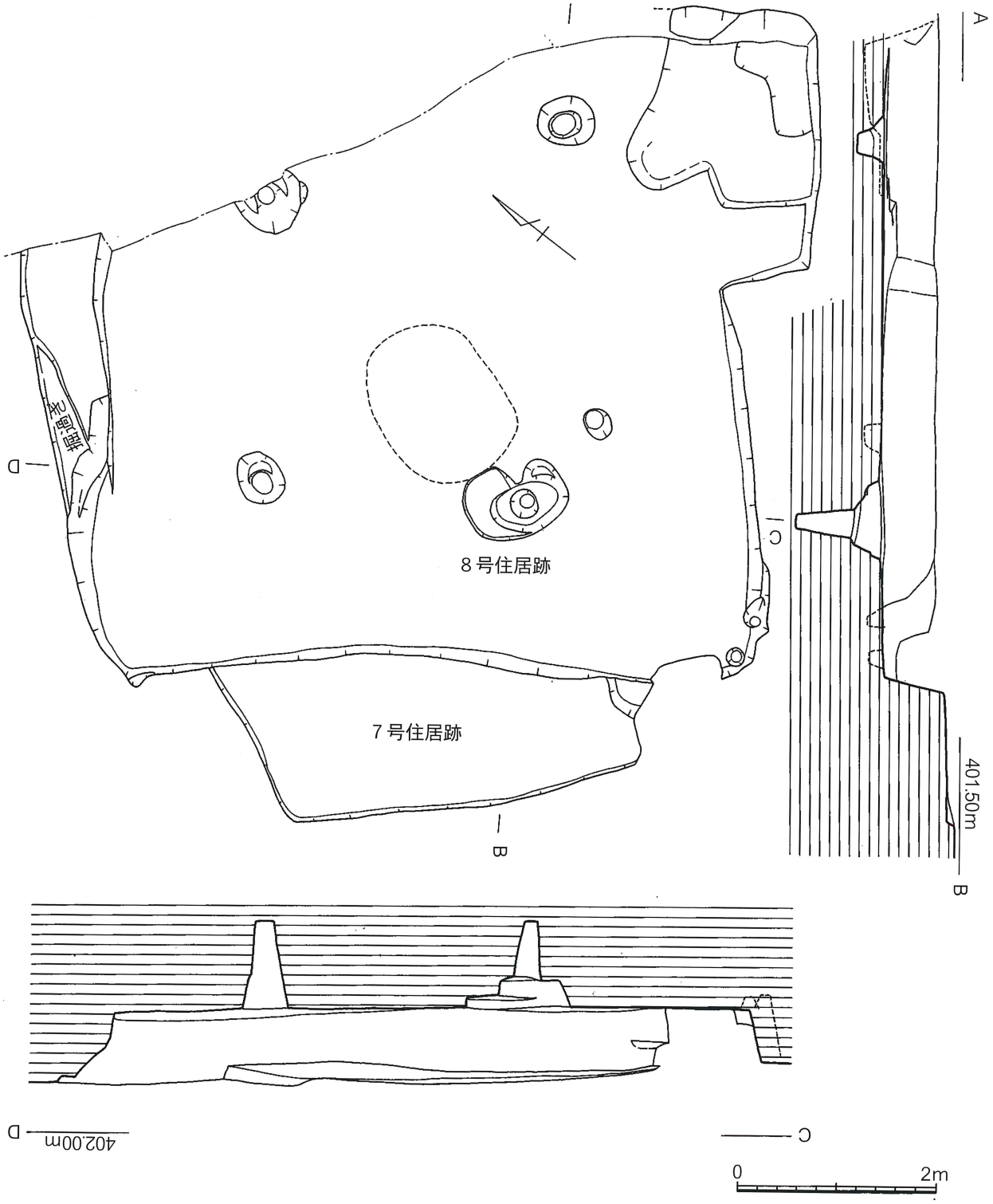
出土遺物（第38図）

土師器（第38図1・2）

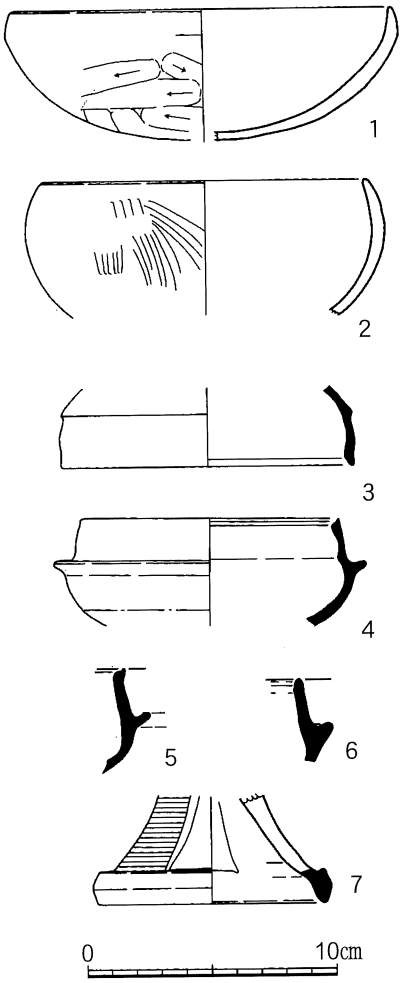
どちらも椀で、1は口径15.3cm・最大径15.8cm・高さ5.3cmを測る。外面は口縁部以外をヘラ削りし、口縁部内外面はヨコナデ、内面は丁寧にナデている。2は胴部が丸く、口縁部は内湾し、口径13.1cmで最大径14.5cmを測る。外面はハケメ、内面は丁寧なナデで、口縁部内外面はヨコナデしている。

須恵器（第38図３～７）

３は坏あるいは高坏の蓋である。口径11.8㎝で口縁端は内側に薄くなる。天井部との境は突出して稜線をなす。内外面とも回転ナデがみられる。４～６は坏あるいは高坏の身部である。４は復元口径10.4㎝を測り、復元最大径12.6㎝・現存高4.3㎝を測る。蓋受けはやや内傾しながら1.8㎝延る。蓋受け部はやや上方に突き出ている。外面の一転破線から下は回転ヘラ削りで整形する。淡青灰色を呈する。５は蓋受け端部に段がつき長さ2.0㎝を測る。器面は回転ナデ整形している。淡青灰色を呈する。



第37図　７号・８号住居跡実測図（1/60）



第38図　７号住居跡出土遺物実測図

６は蓋受け端部の段が消えかかり、長さ2.0㎝ほどである。回転ナデ整形している。淡青灰色を呈する。７は高坏の脚部である。復元径9.6㎝・現存高4.4㎝を測る。透しは３個に想定する。外面はカキメ、その他は回転ナデ整形している

８号竪穴住居跡（第37図）

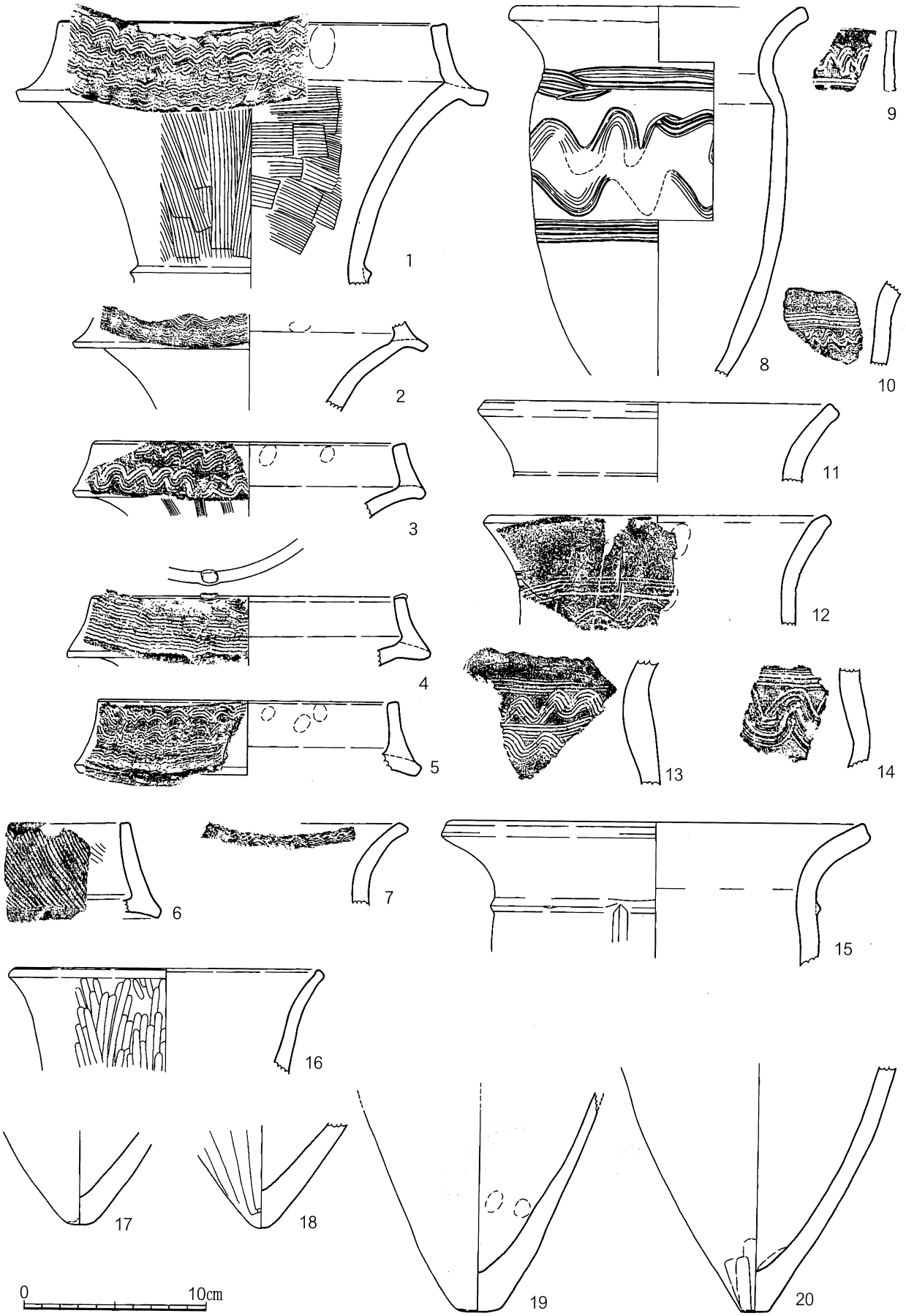
上部の大部分を７号住居跡に切られ、北側は調査区外に延びる。南東の辺には片側に、長さ約2.8ｍ・幅約0.8ｍほどの張出し部がある。ここは隅に向かって下がり床面が二段になっている。８号住居跡の壁の長さは東西約6.4ｍ（張出し部では約7.2ｍ）・南北約6.8ｍである。床面で５個の柱穴を検出したが、４本主柱穴であろう。中央部のやや南寄りに炭化物の分布するところがある。深さは最大で78cmを測る。

出土遺物（第39図）

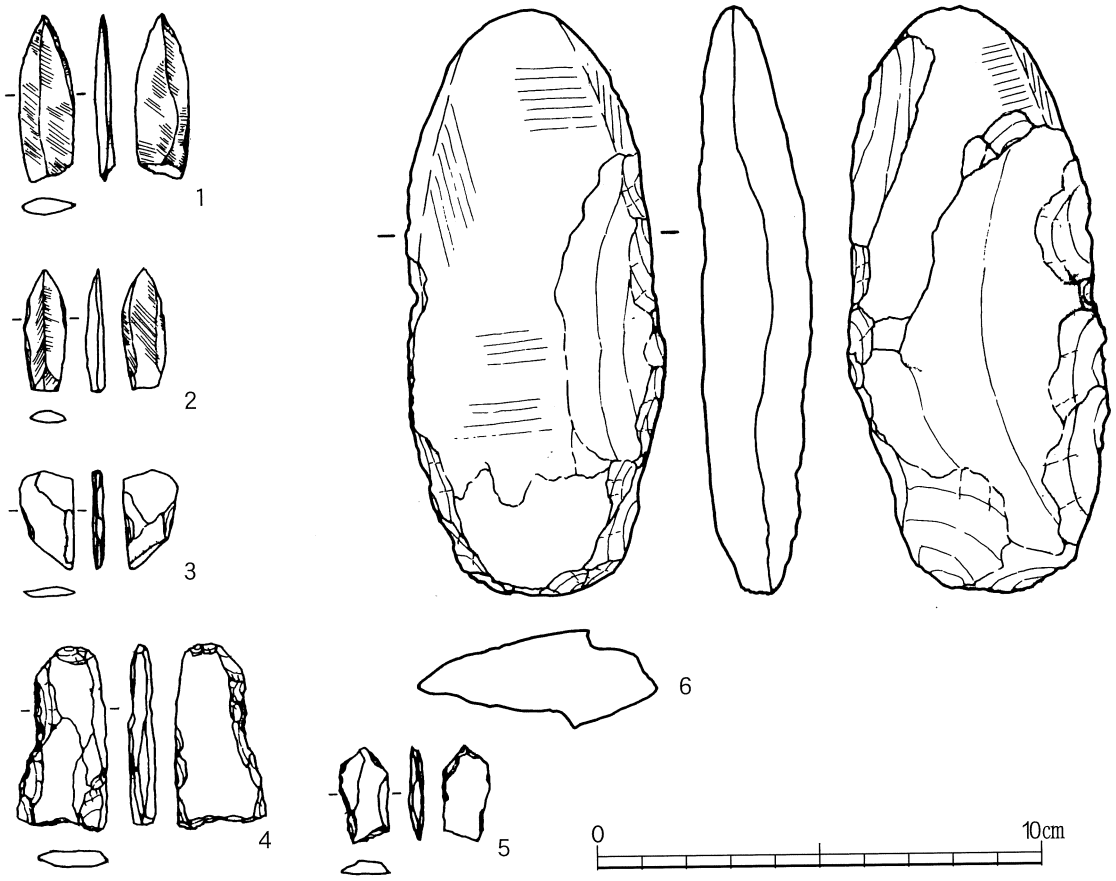
弥生式土器（第39図.１～20）

１～７は壺形土器である。１は復元の口径21.4㎝、最大径26.0㎝で、口縁部はナデ調整、他はハケ調整している。櫛描き波状文を下から上の順に３段施す。金色の雲母を微量含む。２は最大径19.6㎝で、器面の調整はナデ、２段の櫛描き波状文を認める。３は復元口径17.3㎝・最大径19.4㎝で、２段の櫛描き波状文をもつ。４は復元の口径17.3㎝・最大径20.0㎝、器面調整はナデのみ。櫛描き波状文は２段、口唇部に円形の浮文をもつ。金色の雲母を微量含む。５は復元の口径16.6㎝・最大径19.1㎝

８号住居跡出土石器



第39図　８号住居跡出土遺物実測図



第40図　8号住居跡出土石器（2/3）

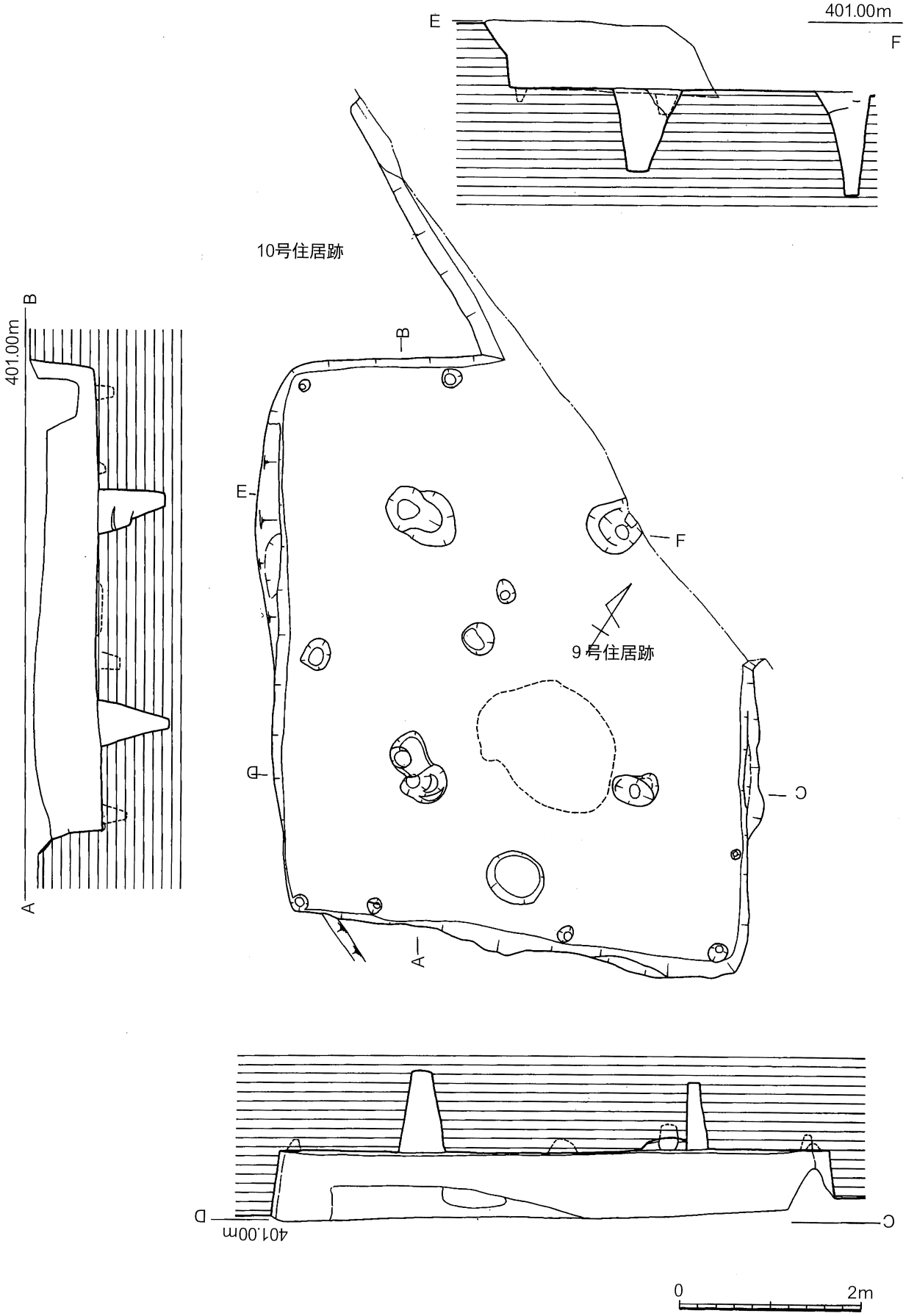
を測る。櫛描き波状文を3段施す。6は口縁部の内外面ともハケメ調整している。7は器面調整はナデのみで、口唇部に櫛描き波状文をもつ。8～15・17・20は甕形土器である。8～14は櫛描き波状文を胴上部にもつもので、ハケメは認められない。器面調整はナデを基本とし、口縁部はヨコナデ、外面下部は縦方向のナデを行なう。8は復元口径16.5㎝・最大径14.2㎝である。

復元口径は、11は19.9㎝、12は19.2㎝、15は23.7㎝を測る。16の器面調整は外面は縦方向のヘラ磨きを施し、内面はナデ。復元口径17.5㎝を測る。17・18は底部が尖り、19・20は小さな平底をもつ。19は底径2.4㎝、20は底径1.5㎝で、外面は縦方向のヘラナデ

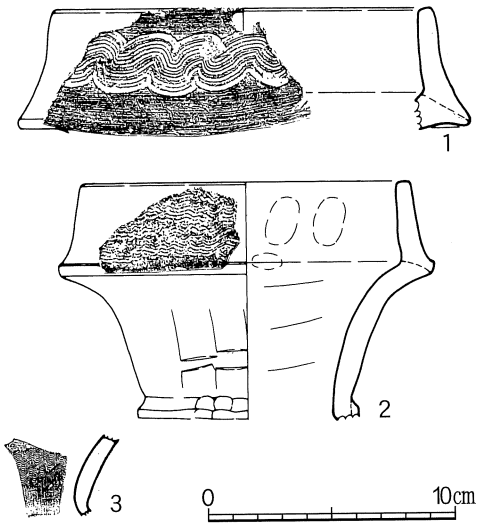
石器（第40図1～6）

1・2は磨製石鏃で、3～5はその未製品である。石材は1が赤茶色で、他は緑泥片岩である。6は磨製石斧を転用し偏平打製石器としたもの。

調　査　風　景



第41図　9号住居跡（下）・10号住居跡（上）実測図（1/60）



第42図　９号住居跡出土遺物実測図

９号竪穴住居跡（第41図）

住居跡群の一番東側に位置し、10号住居跡と重複している。北側の隅は調査区外に出ている。平面規模は南北約6.7m、東西約5.2mで、床までの深さは最大76cmを測る。床面には主柱穴４個と壁際に巡る７個の浅く小さい穴等を検出した。南側の主柱穴の間の床面には、炭化物の分布範囲があった（破線内）。

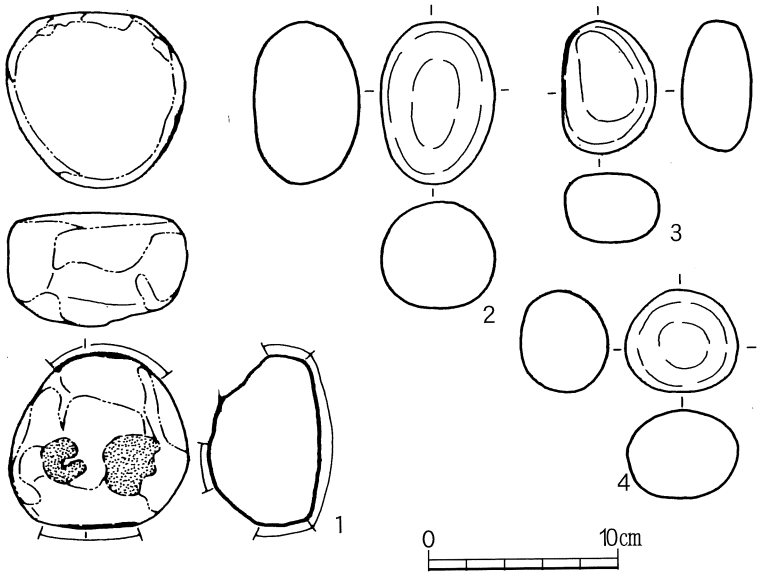
出土遺物（第42図）

弥生式土器（第42図１・２）

どちらも壺形土器で、復元の口径と最大径は１が15.4cmと18.3cm、２が13.4cmと15.2cmである。櫛描き波状文は１が１段、２が３段施されている。

須恵器（第42図３）

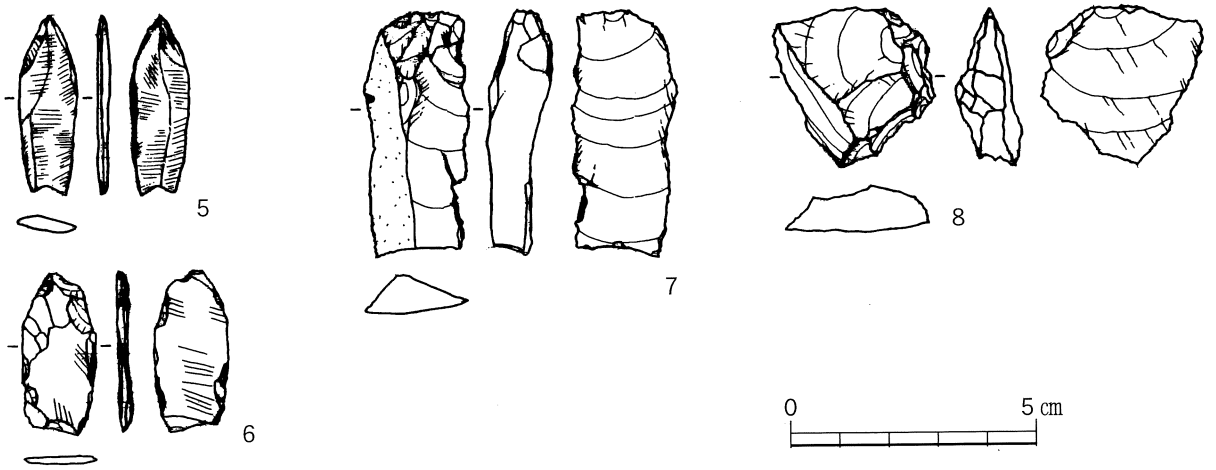
３は小壺か。頸部外面に細かい櫛描き波状文１段がある。黒色を呈する。



第43図　９号住居跡出土石器（2/3）

石器（第43図１～４・第44図５～８）

１は磨石と敲石として機能し、片面は磨り減って平坦化し、長軸の２側面は敲打により平坦化している。２と４は表面全体を磨石として使っている。３は丸みを帯びた自然の礫を部分的に使用した磨石である。５・６は磨製石鏃とその未製品である。石材は緑泥片岩。７は片面に礫面を残す縦長剥片で、縁に使用痕がある。８は剥片の一部に片側から二次加工を加えた削器である。

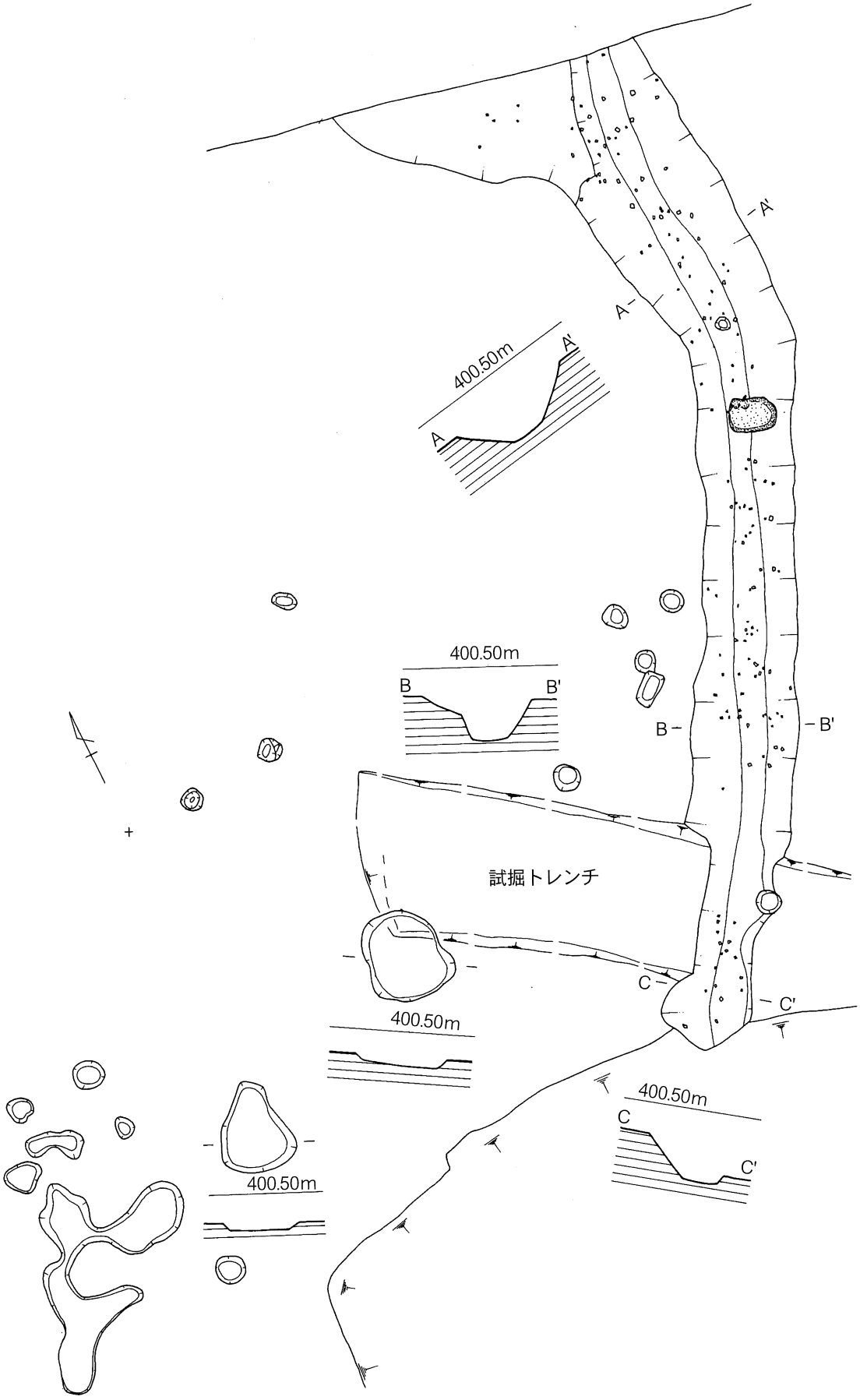


第44図　９号住居跡磨製石鏃・剥片（2/3）

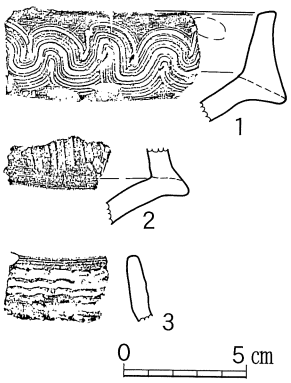
9・10号竪穴住居跡完掘写真

10号竪穴住居跡（第41図）

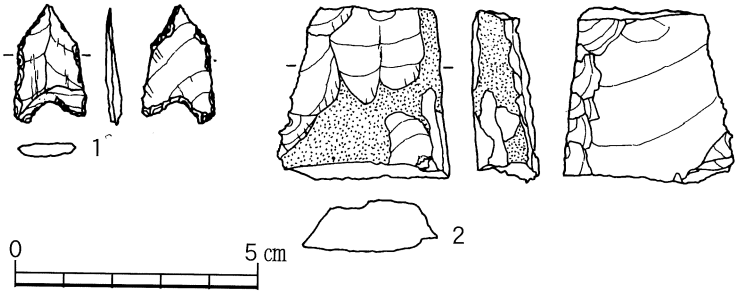
9号竪穴住居跡と重複し、調査区には南壁の一部が現われているだけである。図示できるような遺物は出土しなかったが、弥生時代のものしか認められなかったので、本竪穴は弥生後期のものと考える。



第45図　SD1（１号溝状遺構）と周辺実測図



第46図　SD1出土遺物



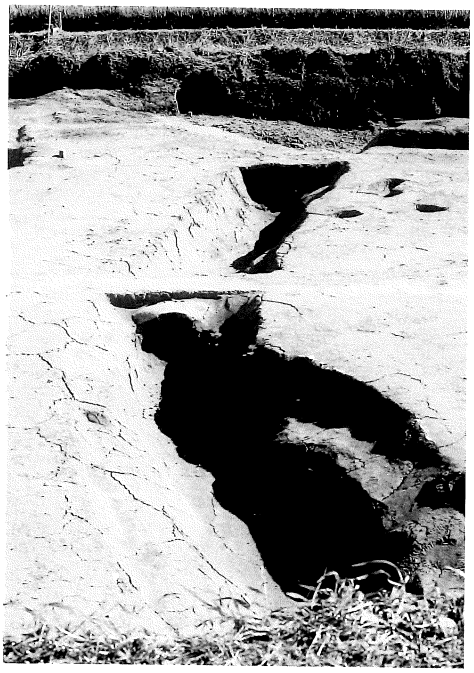
第47図　SD1出土石器（2/3）

溝状遺構

ＳＤ１（１号溝状遺構）（第45図）

Ⅰ区の中央付近に南北方向に走る溝状の遺構で、西側に開くように曲がっている。南側の端は撹乱されており、失われている。

第48図　Ⅰ区SK1（１号土坑）実測図（1/40）



SD1

規模は断面図Ａの位置で上面幅約1.5m、底面の幅は約40㎝、深さ約50㎝を測る。全体的に見た場合、底面は北部に比べて南側で４㎝程度深くなっている。

出土遺物（第46図・第47図）

弥生式土器（第46図１～３）

すべて壺形土器である。１は外面頸部に縦のハケメがある。１段の櫛描き波状文を施している。２は波状文はみられず、口縁部外面と頸部外面と内面下部にハケメ調整がある。３は外面に櫛描き波状文１段を認める。

石器（第47図１・２）

１は剥片の周辺を整形してつくられた安山岩製の打製石鏃。２は縦長剥片で、１側辺に二次加工痕をもつ。下端を欠損する。

5．そ　の　他

４・６・７号竪穴住居跡に囲まれた位置で、土坑群の集中した部分を検出した（全体でＩ区ＳＫ１と称する）。南部には東西方向に走る溝状遺構（近世～現代）が土坑群を切っている。埋土からは礫が投げ込まれた状態で出土したが、近世ころのものであろう（第48図）。

弥生時代石器観察表

図番号	出土遺構	器　種	長cm	幅cm	厚cm	重量g	石材	備考
第22図１	２号住居跡	磨石	10.3	8.1	7.5	828.4		
第22図２	２号住居跡	敲石	8.5	6.7	3.9	301.9		
第22図３	２号住居跡	敲石	14.2	7.8	7.0	991.3		
第22図４	２号住居跡	敲石	11.0	10.9	7.8	1361.3		
第25図１	３号住居跡	敲石	9.4	8.6	2.4	243.3		
第25図２	３号住居跡	磨石	4.1	3.3	2.5			
第28図１	４号住居跡	磨製石鏃	3.8	1.9	0.2	2.0	緑泥片岩	欠損
第28図２	４号住居跡	磨製石鏃	3.8	1.6	0.3	2.4	緑泥片岩	欠損
第28図３	４号住居跡	磨製石鏃	2.2	1.2	0.3	1.2	緑泥片岩	欠損
第28図４	４号住居跡	磨製石鏃	4.3	1.5	0.3	2.9	緑泥片岩	欠損
第28図５	４号住居跡	磨製石鏃未製品	3.2	1.3	0.3	1.4	緑泥片岩	
第28図６	４号住居跡	磨製石鏃未製品	2.1	1.5	0.3	1.0	緑泥片岩	
第28図７	４号住居跡	磨製石鏃未製品	3.6	1.9	0.4	3.1	緑泥片岩	
第28図８	４号住居跡	磨製石鏃未製品	2.6	1.8	0.4	2.0	緑泥片岩	
第28図９	４号住居跡	磨製石鏃未製品	4.3	1.9	0.4	3.1	緑泥片岩	
第28図10	４号住居跡	磨製石鏃未製品	2.9	2.1	0.2	1.1	緑泥片岩	
第28図11	４号住居跡	磨製石鏃未製品	2.5	1.0	0.3	0.8	緑泥片岩	
第28図12	４号住居跡	磨製石鏃未製品	2.4	1.4	0.5	1.2	緑泥片岩	
第29図１	４号住居跡	砥石	7.6	3.8	1.0	33.1	砂岩	
第32図１	５号住居跡	磨製石鏃	4.0	1.4	0.3	1.9	緑泥片岩	
第32図２	５号住居跡	磨製石鏃未製品	2.4	1.4	0.3	1.7	緑泥片岩	
第32図３	５号住居跡	磨製石鏃未製品	5.6	2.0	0.6	10.2	緑泥片岩	
第32図４	５号住居跡	磨製石鏃未製品	8.5	2.6	0.7	17.0	緑泥片岩	
第32図５	５号住居跡	磨製石鏃未製品	3.5	1.9	0.2	2.1	緑泥片岩	
第32図６	５号住居跡	磨製石鏃未製品	2.7	1.1	0.3	1.1	緑泥片岩	
第32図７	５号住居跡	磨製石鏃未製品	2.2	2.2	0.2	2.1	緑泥片岩	
第32図８	５号住居跡	磨製石鏃未製品	3.2	1.9	0.4	1.8	緑泥片岩	
第32図９	５号住居跡	磨製石鏃未製品	2.0	1.5	0.2	0.7	緑泥片岩	
第32図10	５号住居跡	磨製石鏃未製品	3.7	2.5	0.8	4.7	緑泥片岩	
第32図11	５号住居跡	磨製石鏃未製品	2.7	1.6	0.3	1.2	緑泥片岩	
第32図12	５号住居跡	磨製石鏃未製品	2.8	1.6	0.4	1.6	緑泥片岩	
第32図13	５号住居跡	磨製石鏃未製品	3.5	1.4	0.3	1.6	緑泥片岩	
第32図14	５号住居跡	磨製石鏃未製品	2.2	1.4	0.3	1.0	赤茶色で頁岩質	
第32図15	５号住居跡	磨製石鏃未製品	4.1	2.6	0.7	4.8	赤茶色で頁岩質	
第32図16	５号住居跡	磨製石鏃未製品	2.4	1.0	0.2	0.7	赤茶色で頁岩質	
第32図17	５号住居跡	使用痕ある剥片	4.6	4.3	1.1	20.6	流紋岩	

第40図１	６号住居跡	偏平打製石器	9.6	5.3	1.3	105.5	
第40図１	８号住居跡	磨製石鏃	3.7	1.2	0.3	2.0	赤茶色で頁岩質
第40図２	８号住居跡	磨製石鏃	2.7	0.9	0.4	1.0	緑泥片岩
第40図３	８号住居跡	磨製石鏃未製品	2.2	1.7	0.2	1.1	緑泥片岩
第40図４	８号住居跡	磨製石鏃未製品	4.1	2.0	0.6	7.1	緑泥片岩
第40図５	８号住居跡	磨製石鏃未製品	2.1	1.1	0.3	0.9	緑泥片岩
第40図６	８号住居跡	偏平打製石器	13.1	5.8	2.5	245.6	磨製石斧を改変
第43図１	９号住居跡	磨石・敲石	9.5	9.2	6.0	775.0	
第43図２	９号住居跡	磨石	8.6	6.1	5.7	427.4	
第43図３	９号住居跡	磨石	7.1	5.0	3.7	182.9	
第43図４	９号住居跡	磨石	6.0	5.4	4.7	211.4	
第44図５	９号住居跡	磨製石鏃	3.6	1.2	0.3	1.5	緑泥片岩
第44図６	９号住居跡	磨製石鏃未製品	3.3	1.5	0.2	1.8	緑泥片岩
第44図７	９号住居跡	使用痕ある剥片	5.0	2.2	1.2	9.5	
第44図８	９号住居跡	二次加工ある剥片	3.3	3.2	1.3	10.7	
第47図１	ＳＤ１	打製石鏃	2.4	1.4	0.3	0.9	安山岩
第47図２	ＳＤ１	二次加工ある剥片	3.5	3.5	1.3	20.1	

第５章. Ⅱ 区 の 調 査

１．調査の概要

Ⅱ区の調査終了後、道路を隔てた西側の剣道建設予定地を東西48m、幅約12mに渡り発掘調査した。調査面積は約550㎡である。調査前の現状は畑地で、調査区に隣接して南側に旧庄屋の屋敷地があり、北側にも民家がある。調査は重機による表土剥ぎから始めた。表土下はＩ区に近い東部では若干、縄文時代早期に相当する黒色土が薄く残っていたが、西側に行くにつれてより下位の層が現れる状態だった。検出した遺構は近世以降に屋敷として利用されたことがあるようで、その際地下げ工事を行なったようである。本来は、弥生・古墳時代の竪穴住居跡や縄文時代の生活面があった筈だが、削り取られたものとみられる。大型の浅い穴（竪穴）土坑、井戸、溝状以降、階段状の場所等を検出した。

２．竪　　穴

Ｙ－23・24区に２基の浅い穴を検出した。

１号竪穴（第49図・第51図）

ＹＺ23・24区の交点付近に位置し、半分程度が調査区内にあり複数の遺構が重複している。明確な床面は見られず、もっとも深い部分に井戸（ＳＥ１）がある。

２号竪穴（第49図・第51図）

ＹＺ24・25区の交点付近に位置する楕円形の床面の平らな竪穴である。西部でＳＫ25が切り込んでいる。

３．土　　坑

炭竈遺跡　区では近世以降に構築された土坑、溝などの遺構がいくつか認められる。当該時期の遺構は、少数の例外を除いて、出土遺物が僅少で、詳細な時期を決め難いものが大半を占める。また、複数の重複した遺構の遺物を一緒に採り上げているものや、人為的でない掘り込みを遺構と誤認した

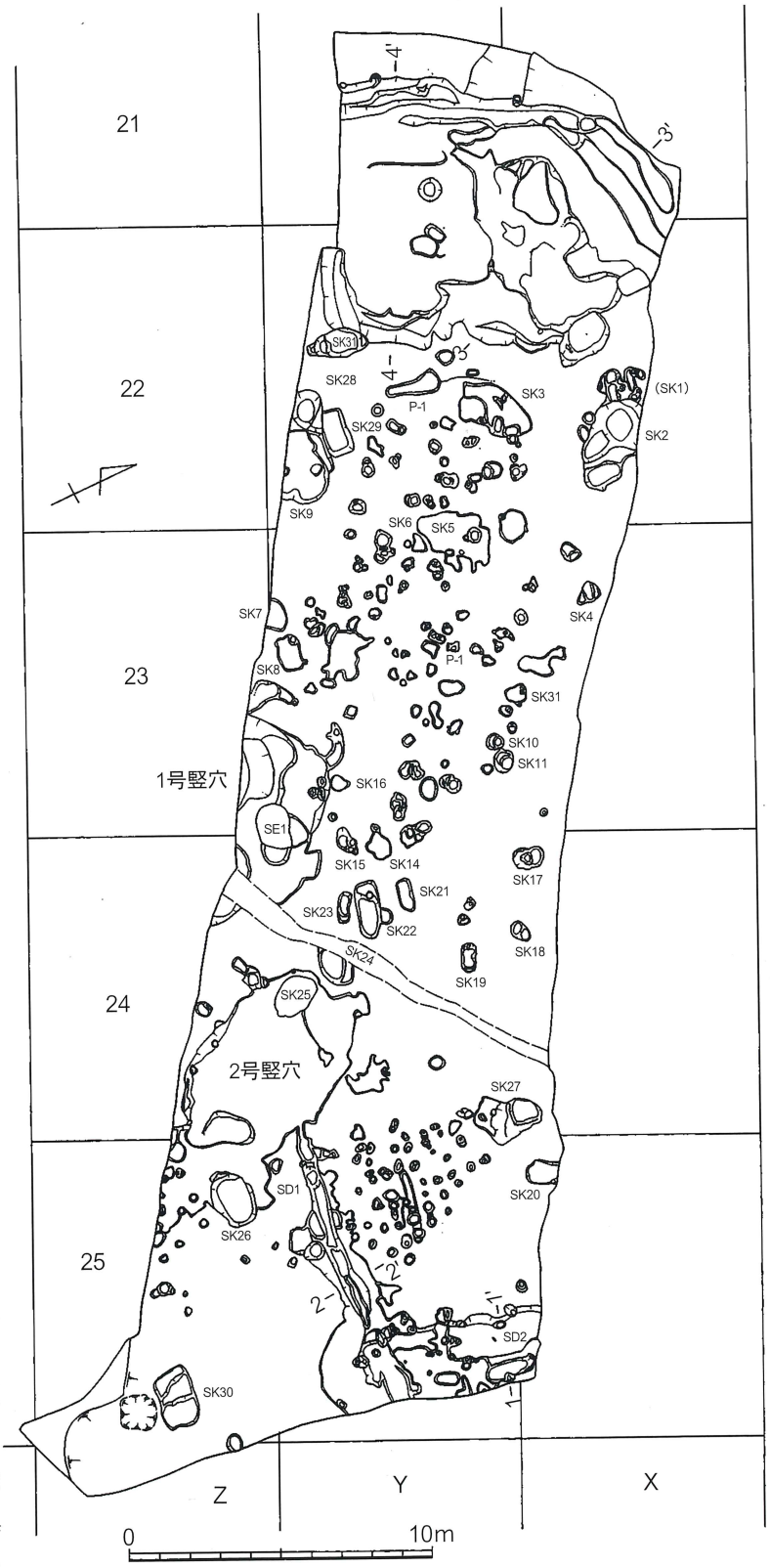
可能性が高いものなどが混在している。以下、土坑（あるいは土坑と認定されているもの）および出土遺物の概略を紹介したい。

ＳＫ１

重機による表土剥ぎの際にゴミ穴（ＳＫ１）を検出した。重機の爪で多量の陶磁器と硝子製品をかきだす結果となり、機械を止めてそれらを回収するとともに残りの穴からも遺物を発掘した。幸い重機により割ったものは少なく、破損品の大半は廃棄時にすでに割れていたらしかった。ＳＫ１は表土層中に存在し、他の遺構の検出面まで下げたときには、痕跡が残らなかったので図化していない。位置的にはＳＫ２の西部の北部に重複していた。

陶磁器類（第52～61図１～81）

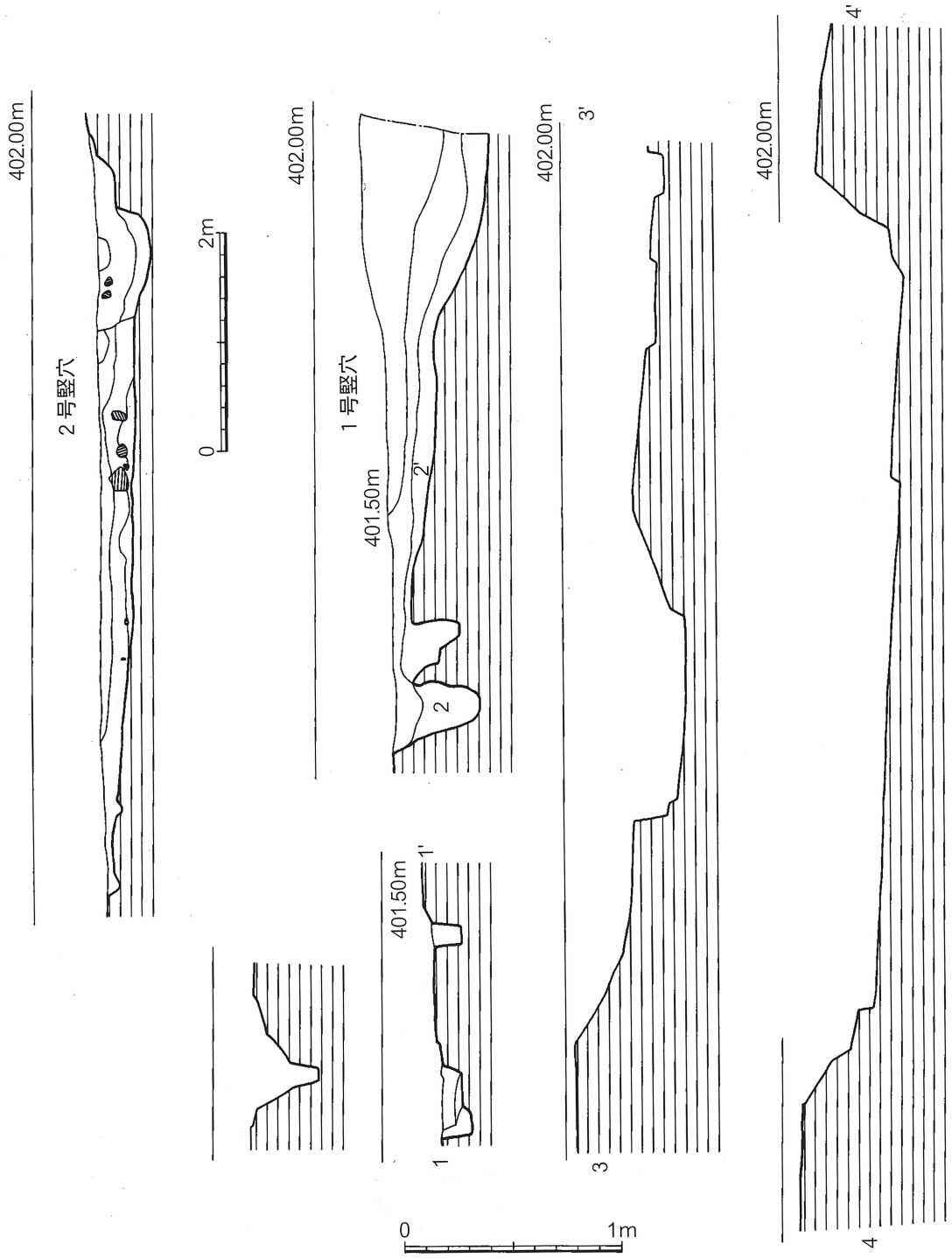
１～81はＳＫ１出土の陶磁器類である。代表的な遺物を提示する。１は肥前産の磁器端反碗で、幕末期の1820～60年代に製作されたものである。２～12は明治時代前半期に製作された印判染付磁器碗で、２～11は端反碗、12は丸碗の形態を呈する。いずれも1870～1880年代の製品である。13～15の磁器碗は、銅版転写技法による松鶴文を描くもので、明治時代後半期から大正時代の製品である。16は大正時代後半から昭和時代前半に製作された磁器碗である。17～19は磁器色絵碗で、大正時代後半から昭和時代前半の製品である。20～41は小振りの磁器碗（湯呑み碗）で、いずれも昭和時代前半期までの製品である。25・26の外面に「梧山」「福」、30の内底部に「澤田製」、31～33の内底部に「北山」、34の外面に「莫山」、36・37の内底部に「小原」、38・39の内底部に「白泉」の銘款がゴム印でプリントされている。42の磁器碗は全体に緑釉を施し、紅葉の文様を描く。昭和時代前半期までの製品である。43～47の磁器碗も昭和時代前半期までの製品で、44・45は胴部下半部に面取りが認め



第49図　Ⅱ区遺構配置図

られる。48～50は手描文様を有する磁器小鉢で、同一文様・同一規格のものである。古伊万里写しであり、これらも昭和時代前半期までの製品であろう。51～53は明治時代前半期（1870～1880年代）に製作された印判染付磁器皿で、蛇ノ目凹形高台を呈するものである。31の内底部には所有者を意味すると思われる「小羽」の墨書がある。54の磁器皿の文様は手描きであるが、呉須の発色の様相から、製作年代は明治時代前半期と思われる。55・56は磁器青磁染付皿で、見込みの龍虎文は銅版転写技法による。明治時代後半から大正時代の製品である。57～63の磁器皿は大正時代後半から昭和時代前半の製品で、63の見込み文様は色絵である。64の磁器皿は内外面に捻花文をモチィーフにした文様を手描きで描き、内底部には判読不明の銘款が認められる。明治時代以降の製品である。65は磁器段重蓋で、呉須の発色の様相から、明治時代前半期（1870～1880年代）の製品である。66は磁器蓋で、端反碗に対応するものである。文様は手描きで、口縁内面に雷文、見込みに松竹梅円形文を描く。呉須の発色の様相から、製作年代は明治時代前半期（1870～1880年代）である。67も磁器蓋で、口縁部および内面は露胎となる。これも明治時代前半期（1870～1880年代）の製品である。68～72は磁器少杯で、いずれも昭和時代前半期までの製品である。69・70は胴部外面下半部に面取りが認められる。また、72の見込みには金彩で、「歩七二・佐藤・紀年」の文字が描かれている。73は磁器瓶類（徳利）で、昭和時代前半期までの製品である。74も磁器瓶類（一輪挿し）で、外面に瑠璃釉を施す。明治時代後半期以降の製品であろう。75は磁器の段重で、外面にはみじん唐草とも通称される退化した花唐草文が描かれている。製作年代は明治時代前半期（1870～1880年代）である。76の磁器合子蓋も明治時代前半期（1870～1880年代）の製品で、外面に海浜風景文を描く。77は磁器水滴で、外面には銅版転写技法による皇居二重橋の文様が描かれている。製作年代は明治時代後半期から大正時代である。78は外面に瑠璃釉を施す磁器杯台で、明治時代後半期以降の製品である。79は磁器蓋、80・81は陶器蓋で、い

第50図　Ⅱ区西部の凝灰岩出土状況



第51図　Ⅱ区遺構断面図（第49図に位置記入）

ずれも胴部に小さな貫通孔を有することから、急須の蓋である。製作年代は明治時代後半期以降に比定されるものであろう。

以上、ＳＫ１からの出土遺物は幕末以降、昭和時代前期までの製品を含む一括資料である。従って、幕末の端反碗や明治時代前半期の磁器印判染付および同後半期に比定される銅版転写技法による染付磁器は、一定期間の伝世と使用期間を経た後の廃棄と考えられる。　（吉田　寛）